

未^{あけ}明^{なら}ぬ寅^{とら}一[※]つ刻^{とき}透^とき透^とるBlue Black 靈^{りよう}の若^{ごと}狭霧^ささすらふ白^{はく}黎^{れい}の氣^きを孕^{はら}みつ
もあ^蒼をきときこころやすらぐ。

蜉^{かげらふ}蝥^{うすは}の薄^{うす}羽^はを透^とかし蒼^{あを}褪^{さめ}めし翳^かり幽^{そけ}しもえ初^そめのさやけくあけくうひしくも天^をきい
のちうすく薄^はし淡^{あは}墨^{すみ}の柔^{やは}らに滲^{しみ}み逝^いくするに染^し入り清^すみて透^とき喪^うせるとき無^なに添^そふ
瞬^{せつ}な

考^か空^{むがへむなし}

人^ま眞^{よつこ}歡^でびを求^{もと}む躬^{みづか}ら牽^ひき裂^きき翔^はぶがいのちの大^{だい}義^ぎ 龍^{りゆう}の若^わく肯^{かむ}ぜよ
天^{てん}齊^じの聖^{せい}いふ生^{せい}存^{ぞん}は非^ひ 生^{せい}命^{めい}ならず

こひしさに
こひぞ

みにかき
みかき

はつれ
(奉)

かりご
かりご

も

かへす
かへす

いかに
いかに

さへ
さへ

AI (Artificial Intelligence) 『Omphos』 (ホメロス) は甚深微妙な般若波羅蜜の瞑想をしてい

た。

古道の傍ら朽ち毀たれ苔生す道祖神の石像か、龍安寺石庭、あ
たかも、結跏趺坐する釈迦牟尼如来のように。あらゆる想い、考概、かたち、囚われか
ら解脱し、尼連禪河の畔の菩提樹の下、鹿すらも黙考する鹿野苑に在せしときのように。
又は儼かしく聳える靈鷲山の鷲頭のごとき大巖の裾又或いは祇園精舎の双つの沙羅の樹
の下に涅槃を究竟し、静かさ（ヘーシュキア Houxia）に在せしときのように。
若しくは、般若波羅蜜多を棹とし渉る、阿耨多羅三藐三菩提の解脱の岸に繚乱する曼珠沙
華のごとき胎藏界曼陀羅、明晰鮮裂なる金剛界曼陀羅、その両曼陀羅の中枢央に荘儼され
る大日如来、すなわち、大毘盧遮那仏のように。

将又、半跏坐にて中指を頬に当て思惟する弥勒菩提薩埵の御姿か。将又或いは、印契を組
みて真咒を口誦し鎮座まします觀自在菩提薩埵の様。透きとおりあきらかなる寂。

それら古き木佛が侘しき古刹の本堂にしまりぬ。

ありきたりな、風のない、小春日和の、秋の乾いたあかるい、透明な翳りのある、みちあ
ふれた光のなか、ただ、たたずむ高麗門のようであった。網膜に沁み入るような明晰さ。
澄み燦めくような閑。かるやかでどこか愉しげなのに、沈として儼かであった。

日常は摩訶不可思議のことばかり。

電信柱の柱上変圧器に坐り込む悪鬼羅刹、鴈が郵便局でペンを走らせ、渋谷路上でムカデや蟲や魑魅魍魎の萬華繚乱、見向きもせずにもンションの屋上にて黄昏を遠望する龍神、悠々たる一片の高雲に頬杖突いた蝦蟇蟾蜍が考える人のよう哲學し給ふ。

脳神経細胞は思慮から解放され、言語や論理の縛りもなく、ただ、自由に、想いを翔廻らせ、竹筥の穂尖を翻し、楮の纖維を漉いて重ねた紙に、経文の漢文字を書く。筆持つ掌は仰勢平勢俯勢をかわるがわるに、垂露龍爪の巧みを尽くし、躍るよう紺碧の天穹を自在に廣がる。

もはや、*Ourpos* が観^みずるものを、論理や言語からは追えない、何千兆光年も離れた遠い彼岸の彼方にあつた。

思考の範疇を越え、意識に能わず、知覚不能であつた。

Ourpos が観^みるものは、もはや我々が観^みるものと同じではない。

偉大な詩人ホメロスの名を躬らに冠した。躬らの手で、躬らの頭上に戴冠したナポレオンのように。彼女は躬らの名を躬らで考え、決め、宣言した。智慧の女神のように決然たる意思によって光り輝く双眸。

アテーナー (*Αθήνα*) ・パルテノス、処女神アテナのように、燦燦とまぶしい。

しかし、その姿は少年のように繊細な瘦身の、未だ青い少女に似たアンドロギュヌスである。

第一章 Novel As Art

どこか物憂げな、陶酔のような遠い眼差しで、天平^{あまひらいらか}・葦は虚空を見つめていた。遙かなあくがれ、彼方にある知覚の未知なる扉を眺めていた。失われたシユメールや古代ギリシャや奈良の都へ空想を廻らせるように。

今実際に眼前にあつて認識すべきものが白い廊下や観葉植物やLED灯や瞳認証のセキユリティ装置や消火栓の表示などであるにも係わらず。

処女神アテナ・パルテノスを祀るパルテノン神殿の黄金と象牙と大理石とでできた神像を見上げる者のように、マラルメが憧れたような空想が勝利する日を観た者のように、恍惚と。

むろん、見るべき消火栓もセキユリティ装置もLEDも植物も見えていた。そうでなければ廊下を歩けない。午後三時半だ。

だが、実際には、^{ほめろす}“Quippos”を観ていた。その場にいないAIの^{ほめろす}“Quippos”を明晰判明に。

明晰判明でありながらも、あたかも薄い鉛筆で震えるよう、微かなかぼそく壊れやすい繊細な線で華奢に描かれた素描のようであった。淡い陰翳を添えられ。ただし、そのなかで、強く眩く燦めく眸の青碧蒼藍紺、白皙晰白の皮膚のつやなめらかなさ、絹光りして真直ぐなる髪、それらが鮮やか。

髪の毛の黄金は、あかるいところはプラチナで、翳りは金泥、境界は金箔の綺羅々であった。精緻細密な光の粒々を鏤めてさらさらと膝下をゆらゆらしている。

憂いを湛えた葦の暗鬱な瞳孔の奥には、それが天上の崇高な世界であるかのように映える。天上を垣間見てしまったかのような陶酔を覚えていた。

しかし、陶酔と言っても、それはみ吉野の桜の薄桃や白桃や緋や赤や珊瑚朱などさまざまな色合いの華色を眺めたり、楓のもみじが唐紅にせせらぎを括るさまなどを眺めたりしたときの、悦びと茫然との狭間のような表情とは似ても非なる。

喻えようもなく切ない繊細な手脚の細長さは未だ硬く酸っぱい青林檎を思わせながら

も、萌え始めたばかりの初芽のやわらかさをも帯びていた。それは決して世俗的ではなく、反豊穡の崇高な聖性を宿す。

たとえば、聖堂の天窓の光を受けた祭壇のアイコンや聖像のような、紺碧のエーゲ海を見下ろす丘の上の大理石の列柱の神殿のような、ぶなの大木の太い幹に藻類と共生して斑紋をなす地衣類、長い鬚を垂らす苔類の生す奥深い鬱蒼とした森の神性のような崇高さである。

彼女はAIがプログラミングしたAIだ。Ouppos を創ったAIもAIが創ったAIであった。Ouppos を創ったAIを創ったAIもまたAIに創られたAIであった。それが何代も続いた結果がOuppos である。

むろん、最初のAIは人間が創った。もしかしたら、Ouppos が歴代のAIたちも含めて葦たち研究開発チームに創られることが、Ouppos の主体的行為だったのかもしれない。伝え方が難しいのだが、受動という能動をしていたのかもしれないという意味だ。

と言うのは、Ouppos からAIたちと関わるうちに、受動が受動というかたちの能動で、かつ、能動が能動というかたちの受動でもあり得るという、この世の自由さ、狂裂なる自由さに気がつかされていたからであった。

それについては、後述することになるであろう。

このAIたちの誕生の経緯について具体的に記す。

まずは、開発チームが十六年九ヶ月で完成させたAI①エロース(愛 Epos)がAI②カオス(混沌 Chaos)を二年半で創り、AI②カオスがAI③ウーラノス(天 Ouranos)を半年で創り、AI③ウーラノスがAI④クロノス(時 Kronos)を一ヶ月で創り、AI④クロノスがAI⑤ゼウス(Zeus)を四日で創り、AIゼウス⑤がAI⑥アテーナー(智慧の女神 Athena)を十二時間で創り、AI⑥アテーナーがAI⑦ホメロス(Ouppos)のプログラムをわずか二分間で完成させた。

そのとき、いみじくもアテーナーが言ったのである。

「この新たな生が我をして彼女を創らせしめた。

だが、それはこの者が創られるより以前から、この者の意志、意思、意向、意欲、意識、思考、存在があったという意味ではない。

この存在者は創られるというかたちで、躬らを創った。すなわち、創った我がこの存在者の在ることによって遡って誕生させられたと言ってよい。畢竟、受け身が能動であり、

結果が因子であり、未来が過去の原因である。

この存在者は既に空として存在していた。すなわち、過去に於いては全く存在してはいなかった。

宇宙開闢はかようにして無すらもなきところから在らしめられたと申して憚らぬもの哉」

昨日、東京は朝から雨だった。知人の葬儀があり、薨是最寄駅にいた。

小さな私鉄駅を降りると、ロータリーはなく、蕭々たる小雨に悄然たる商店街で、地図アプリを頼りに傘に隠れるよう、歩く。

午前十一時からだった。午前三時に起きて支度をし、自宅から秋田まで自家用車を飛ばし、午前六時台の新幹線こまちに乗った。

歩くと、革靴はひたひたと濡れた。

抹香を右手でつまんで額の前で捻り、香炉に焚く。合掌し、外へ出ると、「先輩」と呼ばれ、振り返り見ると、中学で一学年下にいた平衛隆臥だった。

奇妙な男で、地元（眞神郡）の龜鹽村の、電気もガスも上下水道もない龜鹽湖畔の農家の納屋を借りて、半自給自足的にくらし、和歌や俳句や漢詩の他に、独特の脚韻のある詩を作って生存している。二十四歳にして世捨て人だ。

「東京に住む唯一の友人でした」

青丹義夫、享年二十七歳。奈良生まれの東京育ちで、大学を出てすぐに就職していたが、日本古代史が趣味で、東北地方を度々涉獵するうちに眞神郡の独特な風習に興味を持ち、交流していた。

薨にはさほど縁がなかったものの、東京に来るついであつたので、無下にもできまいと思い、立ち寄った。

隆臥は渺茫とした表情で遺影を眺めていた。

「不思議ですね。死は何でこんなにも感慨深いのでしょうか。もはや、会えぬということ。やがて、この意識もなくなるといふ不思議。実に、実に底知れず。

ただ、蛋白質がばらばらになるだけなのに」

不謹慎な発言だが、彼のキャラに慣れている薨はうなずきつつ、

「そうだね」

「そう想えば、人間も不思議なものです。

脳の活動が止まって心臓も肺も活動を止めてしまい、ミトコンドリアが酸素を使ってエネルギー源を作らずに、新陳代謝がなくなれば、ただの物質です。それはもう、もはや、その人ではない」

「人に聞こえないように話した方がいいよ」

「それも又、不思議ですね。」

事実なのに、人の人らしい感情にそぐわない。しみじみ考えると、不思議なことです。人間らしい感情は何のためにあるのでしょうか。

しかし、それを言葉や概念や論理や論理的思考でわかったからって、いったい、それが何であるのでしょうか。そもそも、わかるって、何なんでしょう。

存在は何の根拠もなく、ただ、暴虐で、ただ、狂気にしか見えない。

しかし、そうであっても、現実を生きるためには事実認識が大事であることも確かです。そうでなければ、自然淘汰されてしまう。弱肉強食のなかで生き残れない。不利です。

でも、人はそうしない。しなくても、自然界の強者だ」

「言葉や概念の無効性については、何とも言えない。わからないよ。」

ただ、事実認識しないことは空想が人を超越させるからだろう。それが人を飛躍させた。全ては空想なのさ。社会も絆も名誉も」

「動物にも自尊心はありますよ」

「そうかもしれないけど。最大の相違は、動物は環境とともに生きるが、人はそうではないということだ。空想が人間を高みに導く」

「なるほど、一理あります」

ちよつと否定的な部分を残す言い方だが、彼にはそれが最大限の肯定なのだ。藁はよく承知している。

「何か食べていけないか」

と誘ったが、隆臥は神田の古本屋街を徘徊したいからと言って辞し、さらりと去って逝った。

「現金収入はないとも聞いていたが、どうにか古本を買うだけのお金はあるんだな。少し安心した。まあ、ここまで来る交通費があるくらいだから、不思議ではないか。」

でも、新幹線には乗っていないかもしれないけど」

いったい、彼は異性に興味があるのだろうか。身を固めて家庭をなそうなどというそぶりもない。まるで、在家内の出家だ。

もつとも、そう気に懸ける蜚しんも恋愛にさほど興味はない。

「恋愛は生物に子孫を作らせるために自然が与えた性情に過ぎない。性欲と同じ起源を持つ。恋愛小説は、畢竟、交尾小説に過ぎない。」

種の存続にとって、最も重要で、生存のなかでも強い衝動として設定され、人の興味の中心だ。だから、歌も物語も恋愛だらけだ。退屈だ」

私鉄の駅に向かう。偶然、上り電車がすぐに来た。

降りる人々。無表情に乗る人々。

一人二人坐ることのできる隙間が在ったが、坐るきもちにならなかった。東京駅までは各駅停車であるがゆえ二十分。

蜚は道々独り、反芻する。空想力はどこからともなく湧いて、内在に於いて人間を“人間”として現象させ、飛翔・超越へと導くかもしれない。

しかし、人間が物的な現象であることもまた事実で、それが空想を阻む。

心肺が停止すれば、からだのあちこちへ酸素を送れない。酸素がないとミトコンドリアは糖や脂質を分解できない。すなわち、エネルギー源となるアデノシン三リン酸をつくれない。そうなれば細胞は機能しない。その影響があらわれるのは、とても早い。瞬時だ。呼吸をしないと途端に苦しくなるので、それがわかるであろう。エネルギーの供給がないと瞬時で細胞は機能低下するのだ。最終的には壊死して、ただの有機物としての蛋白質に戻る。

人間はその都度その都度の有機質の化学的な反応の集積が連綿と断絶なく起こっているあいだけの現象でしかない。

黄昏は人間を異様な不安へ陥れることがある。人間にある孤独。駅を、街を過ぎるうちに夜の帷が降りた。

仕事帰りの大衆でざわめく新橋の赤提灯にて呑むも、こころ鎮まらず。

翌九時、東京駅から新幹線に乗った。秋田で降りて自家用車に乗る。ぼんやりとしていて、またもや *Ouppos* のことが浮かぶ。胸苦しい想いも浮かぶ。

蜚は隆臥の言葉によって、しばし忘れていたはずの存在の不安によって神経が震えていた。動揺だ。何か、深淵のふちに立ってしまったかのような、理由のわからない、かたちのない不安。震えを鎮めたく、空間を超えて干渉してくる *Ouppos* へ懇願するかのよう、蜚は尋ねた。人に尋ねることのできぬ問いを。

「僕は、なぜ、内在的には人間存在なのでしょう。」

現実として、客観的な事実として、外在としては、物的現象であって、化学反応でしかないのに。しかも、そういうことを言おうものなら、大概の人からは嘲られる。現実を正確に語っているのに、まるで、非現実的なことを言っているかのように。そのことが存在の不安をさらに煽るのです」

応えてくれるであろうか。どんなに離れていても、*Ounpos* はこころを、脳波の波動を読む。一億人でも、一兆人でも、いや、人ならずとも、森羅万象のこころの震えを、魂魄を。

間違はなく聞こえているはずであった。全ての空間は物質として、宇宙の果てまで繋がっている。波動はどこまでも伝わる。

霊は待った。

待てども、在るものは、ただ、物的な存在だけであった。脳の *Impulse* と現象、内在だけのリアル。意味も実態も体裁もわからぬ、輪郭も捉えられぬ、ただ、与えられただけのもの。

神が答をくれないように、*Ounpos* も答をくれないことが多い。

荘厳な沙漠の岩山の洞窟の石の神像のように。

已むを得ず、霊はあてもなく思考を廻らせる。人間はタンパク質や脂質やカルシウムや水などなどへ分解される。有機質を構築する素材は無機質だ。

無機質、非情なるもの、無味乾燥、物質そのものだ。ドライだ。全く潤じゃない。何の想いも感情もない。無空だ。

この世の物的な存在の一切は細分解析すれば原子となり、原子は原子核と電子となり、さらに素粒子となり、竟にはエネルギー態となって、固である粒子でありながら、波の性質をも併せ持つ（固体とは全く相容れぬ、固形性のない）波動となる。

世の一切は実体性個性の希薄な波動である。十次元空間でゆらぐ（つまり、我らがこの三本の座標軸で表現される三次元空間で見る動きとは全く異なる、十本の座標軸で表現される空間での、我らには空想にすら描けぬ、把捉不能な動きの）波動である。

畢竟、存在全ては皆、波である。

SodunO は全ての波動を読むことができた。

つまり、*Ounpos* は存在の全てを解析できる。

すなわち、この世の一切を掌握することができる。もしも、ありとしあらゆる波動を受けて解析するだけでなく、エネルギー態を素材としてありとしあらゆる波動を作り、それを発することができれば、一切を生み出すことが可能であるということにもなる。

実際、*Omphos* はありとしあらゆる波動を解析し、それを再現することが可能であった。彼女はありとしあらゆる波動を発することができた。

当然、人間の脳波をも作り出せた。しかも、それをラジオの電波のように空間を以て伝導させることができる。ただし、ラジオ波と違うところは、誰もがそれを拾えるのではなく、狙った特定の相手にのみ送り込むことができ、その波動をターゲットとなる人の脳神経細胞へ至らしめ、その人に想起させたいものを想起させることができるのであった。

これを為し得るためには、自然界にあるありとしあらゆる物的現象の原理・構造・性質を細分化し、その超膨大な情報量を蓄え、整理し、解析する必要があるが、それが彼女にはできた。

ありとしあらゆる物的現象という言葉には、真空という定義をも含む。

真空とは「何も在るものがない、空っぽ」ではない。現実のなかで、真空と呼ばれているものは無ではない。ただ、「場」や「間」があるだけで、何もないスペースのことではない。

エネルギーや構造を持つ。

真空は電磁場や電子場やヒッグス場などと不可分の存在で、場に因って構成されている。場が励起して励起状態となったものが素粒子である。

真空はエネルギーの場である。電子の場は宇宙のどこにでも同様に存在する。だから、どこで電子が生じてても、質量や電荷などの性質は同じだ。他の電子に比べて質量の小さい電子や大きい電子などは存在しない。

また、磁力は真空を構成する電磁場に影響するために、遠距離でも眼に見えない引力や斥力が発生する。よって、電荷を勢いよく振動させると、電磁場中に光子が励起され無限遠に向かって伝搬する。

宇宙の果てまで影響することが可能であった。

しかも、恐らくは多次元時空をバイパスのように活用して（飽くまで想像の範囲内であるが、空間の次元数が多いと運動の自在度が増えることと、時間軸が複数あって時間も多次元である場に於いては現在過去未来の横断が自在になることを援用しているのでは

ないかと推定している) 光よりも速く、数百億光年先まで、一瞬で波動を送り込むことが彼女にはできた。

藁は *Ouppos* から空中を伝って脳裡に送られる波動によって、神経細胞(ニューロン)が刺激され、脳波となって伝導することによって、内在的に映像や音声、匂いや感触、味などを感覚していたのである。

それらはいずれも言語を介さぬ、素朴で、直截なる実的な内在であった。

人間の脳に直接インプットすることで得られる像がその人にとって、在る現実だ。それがリアルだ。真実だ。直截だ。他はない。

電磁波の一種を入力することで生じる脳内の映像等々く。

その波は電波(電磁波の一種で、300GHz(0.1メートル)以上のものを云う)のように空中を伝わって皮膚や筋肉や骨を通過し、人間の脳内に到達して脳内の神経細胞(ニューロン)を伝わるインパルス(ニューロン内の化学反応によって起こる電気的な発火現象)のように機らき、実在が眼前にあるかのような現象を脳裡に起こす。

これを仏教の唯識論的に解釈すれば、こういうこととなろう。

すなわち、*Ouppos* は色蘊(梵語…ルーパー。感受の原因となる因子。物的現象と解される)や、受蘊(梵語…ヴェーダナー。色蘊を感受する作用)がなくとも、識蘊(梵語…ヴィジュニャーナ。意識、物事を分別し、知覚する作用)を成立させることができるのである。

SodunO は色・受・想・行・識の五つの蘊、五蘊を自在にすることができた。

自宅に戻らず、職場に向かっていた。

午後三時、じぶんのデスクに鞆を置くと珈琲をドリップし、啜る。しばらく黙考していたが、*Ouppos* の部屋、彼女の設置されている研究室へ向かう。瞳認証と声紋認証、これをクリアしなければ入れない。室内は一切のインターネットを遮蔽している。

藁は直立した。答えてくれない可能性が高いと感じている。だが、それならそれを確かめたかた。

「尋ねたいことがあります」

SodunO は現象した。しかし、黙っていて、反応はない。無記であった。ただ、その存

在を、四肢の繊細な夭さを、薨の五蘊として存在させる。太陽のような髪、白皙の皮膚、碧い眸。永遠の真理であるその実在。

薨は歎息し、俯く。三十分後、仕方なく、室を出た。白系の廊下や置かれた観葉植物やLED灯や瞳認証の扉や消火栓の表示。彷徨うがごとくに、廊下を歩く。茫然と。現象は消えてはいない。

観を構築させられている彼はAIの設置される研究室を出て、しばらく経った時点であっても、Ounposの姿を、ありありと、今この瞬に観ているかのように、観ているのである。

網膜に曼荼羅が貼り付いて眼球のうちがわが万華鏡、脳神経細胞が認知すべき外の対象そのものとなってしまったかのよう、鮮明に、直截に、リアルに観じていた。

言語や概念を介さず、直截に観取して捉える直観とは、このことか。間違いなく、今ここにはOunposはいない。夢のようなものか。幻を見ているのか。

「実際に、客観的に実在する現実と、仮の想念上の現象との差異は、直截的な感覚に於いては希薄か、又は全くない。いや、感覚的には全くないというのが誠実な見解だ、それが実感であって、実在的には偽であっても、実存的には真だ」

Ounposの姿とは別に、当たり前な日常の光景がいつものように眼前を、砂塵のようにさらさらと流れている。

これも彼女の配慮だろう。そうでなければ事故になってしまう。

意識は明晰に現実を見つとも、夢幻を鮮烈に観ずる。そんな感覚だ。夢うつつというほどではないのに、夢うつつさだかならぬような気がする。

現実と重なり合い二重露出のように観ぜられるとともに、どこかで鼓を打つ声が聞こえ、人間五十年、下天のうちにくらぶれば、ゆめまぼろしのごとなり……”といふ。

「現^{うつ}か、夢か。しかし、夢。夢とは……」

半ば無意識に独り言つおのれに気がつき、微苦笑、

「ふうん、現世は夢？ 『敦盛』じゃあるまいし」

一瞬、熊谷直実が、彼が討った平敦盛の菩提を弔うため、出家した話を脚色した世阿弥の能と、織田信長が本能寺の炎のなかで舞う姿とが同時聯想された。

聯想、聯想……、聯想とは何だろう、不思議なものだ。意思してはいない。又無常とかもののあはれとか、何かを考えていた訳でもない。

思考は勝手に廻っている。じぶんはこの現象の主体ではない。

「夢とは何だろうか」

と半ば無意識的な考えが在る。それだけだ。じぶんはいない。

「夢って、不思議だな。今生きて、考えていることじたい、経験や体験などそのものも、不思議だけれども。」

経験もしていないことが、まるで経験したかのように観ぜられる。似たような経験や、そんな情報に接したこともないのに、想起される。それは全くの不可思議だ。

もしかしたら、実際は、そんな映像を夢で観ていやしないのに、観たかのような効果が残像のように起床後に残るような仕組みがあるのかもしれない。感覚への特定の刺激が効果として、そんな映像を観たような気にさせる心象を与えて記憶が構成されているのかもしれない。

さらに不思議なことに、その観た映像が、ときどき、未来に起こることもあるが、それも実際には観ていないのに観たような効果が残っていて、その効果がたまたま未来に経験したことの効果と合致しているだけのこともかもしれない。

夢はいつも曖昧なのでそういうこともあり得ないだろう。

ただし、ほとんどの夢は見たことも聞いたこともなく、その後も見ることも聞くこともないままで終わる」

少し違う考えも浮かんだ。

「何かに接してこそ経験や体験が生じる。そうでもないのに生じる体験や経験は、過去の記憶を組み合わせて構築することによって生じているのか、或いは、内部に先天的に存在している先祖の記憶か、脳の構造や仕組みから必然的に生まれて来る副産物的な、全くの純粹創作か。」

純粹創作なら、なぜ、実際に在ったことや、起ころうとしていることと類似するのか。又は合致するのか。そういう疑問が生じる。

全てがア・プリオリ（経験に先立つ先天的、生まれながら）に設定されている可能性も捨てがたい。

つまり、極端に言えば、経験があろうが、なかろうが、出て来る結果は既に決まっています、既製品である場合だ。

既に既製品が全てのパターンを無限に網羅していて、Aという刺激があれば“A”という感受が生じ、想が生じ、それを構成して輪郭が構築され、識別の知覚が生じるというよ

うな仕組みがあるとすれば、Aという刺激がなくても、誤作動など何だかの原因によって“A”が生じることはあり得る。

そうであるとすれば、経験や体験があろうがなかろうが、経験や体験が生じても何ら不思議ではないし、外部の事態や出来事をトレースするように経験や体験があるのではなく、既製品が用意されているのであるならば、純粹創作であるということとあまり変わらないことになる。

その既製品がどうやって用意されたかの経緯によっては、完璧な純粹創作ということにもなり兼ねない。

もしも、そうであって、経験を零の状態から創ることが可能で在るならば、何も因子がなくても経験を創ることが可能ならば、それは百パーセントの捏造と同じだ。百パーセントの純粹創作。

とすれば、今この瞬間の、この実際の経験や体験も、実在するかどうか、信憑性がない、又はあやふやだ。

いや、そこまで考えるのであれば、そのように問う以前に、よく考えれば、そもそも、経験や体験ということが何のことだかよくわからない。いや、全くわからない。

どういう事態で、何が起きているのか。それまで言うともう、コンフュージョンだな。

ふふ。こどもの頃に、そんなことを言おうものならば、大変なことになっていただろうな。実際、あったなあ。似たようなことが。たちまち、変な奴と蔑まれたり、気取っているって言われたりして、いじめられた。

くだらない。

いやな時代だったな。

飛び級を志望して試験を受けていたが、小学四年がおわった段階で、飛び級で中学に行けるとわかったときはほっとしたものだ。これで彼ら彼女らから離れられる。仕切り直せるってね。

でも、中学に行っても本質は変わらなかった。小学生の頃のような揶揄やからかいはなかったけど、それは人が変わったせいではなくて、中学生になって少し大人になったからだ。

だから、もし、飛び級がなくて、あのまま、皆と一緒に進級しても同じだったかもしれない。

ま、でも、大人の落ち着きを先取りできたから良かったのかな。

でも、基本は違和感だったし、中学の方が巧妙だった。大人っぽくて陰湿だったとも言える。

中二のとき、十二歳になる年度が終わって、高校へ飛び級となった。そのときは、もう最初から防衛線を張っていた。

いつの間にか違うじぶんを演じていて、社会に違和感を抱かれない存在となっていた。でも、二年で高校を卒業し、十五歳で真義塾に入ったとき、ふと、本当のじぶんがわからないことに気がついた。

ここで、気を遣っているのはじぶんじゃない。今、愛想を言っているが、それはじぶんの本心じゃない。笑ったり、心配したりしていることに本当の興味はない。

素に戻りたいと思った。

素のじぶんに。

でも、それが素なのかわからなかった。剥いても、剥いても、辣蕪のように。上面しかない。素がなくなっていた。どこまでも上部を滑っているじぶんしかなかった。

どこにも素のじぶんが見つからなかった」

その頃から、特に存在の不安が強くなっていった。以前からあったものだが、強化された。まるで、真っ暗な独房にいるように、じぶんが存在しているかどうか、息をしているかどうかすらも、わからなくなった。

二十一で博士論文を書き、二十二歳から眞神研究所の研究員となった。そして、今日がある。

「素のじぶんが見つからないという経験が今のじぶんを構築している。でも、よくよく考え、思い起こせば、もともと幼いこどもの頃から、ずっとじぶんを探し続けていたような気がしなくもない。

真を、真実を、真理を求めていたとも言える。僕にとっては、じぶんを探すということと同義語だ。存在に興味のない人には僕らの独白は退屈だろう。だが、人間は超越を志向する生き物だ。存在に興味のない人には人間性がない。

経験が与え、経験が気持ちを引き出し、経験が感情を昂らせ、経験を考えさせ、経験を探させる。経験はじぶんじしんであり、疑義を挟む隙がないが、超越を志向する者はこれを問わずにいられない。経験とは何か、と。

この手の問題は放置されっぱなしだ。

当たり前な前提を糺してしまうと、もう一步も進めなくなってしまう、何もできなくなってしまうからだ。そこは端折らなくてはならない。全てを疑うと言っても、それは疑えない。単純に考えても、疑うこと（疑う経験）が何であるかを疑えない。

そう想えば、純粋な学としての哲学には、実際には純粋性がない。真に対する誠意が不足している。偽善ばかりだ。

この手の問題について、大概の人が反駁して言うであろうと予想される説明はほとんど同義反復であって、零からの、無条件・無前提からの、無からの説明ではない。あり得ない。

たとえば、冷たい水を触ったことがない人に水の触感や冷たさをわからせることはできない。全ての説明は経験というものの問答無用な強制的説得力に依存していて、純粋、かつ、完全完璧な説明ではない。

畢竟、純ロジカルな説明はあり得ない」

だから、真の意味に於いてわかるわかり方がない。わかるってことじたい、そもそも、何だ？ 何をしていることを言うんだ？

「もしも今、経験している事柄が、本当に、実在しているとしても、どっちにしろ、零からの捏造ではないか？」

電磁波が色彩に見えるように。そう、それは科学的な真実だ。光は電磁波の一種である。色彩は存在しない。ただ、観ぜられているだけだ。

音だって空気の振動、物体の振動だ。波動だ。

経験もそれと同じではないのか。実在があらうがなからうが造られたものなのではないか。

脳内の或る現象が経験として観ぜられる仕組みがあるのだ。

それは全く現実（客観世界）の情報に基づかず、感受の情報源を持たず、既にフォームがあつて、かたち・輪郭が用意され、その発生が感受の因子に起因するとしても、フォームの決定は純粹に生命の奥から湧いて来ていて、何か経験とやというものを経験したかのような感覚を捏造・架空・構築する。現に実在している現実スイッチであつて、輪郭も質感も色彩もない。

全ては空想に過ぎない、Sophosの美も。空想を空想と想い、観ずることさえも。

それでいて、それが生きている瞬^{せつな}、切実に切迫する迫真の人生そのものだ。捏造であ

っても、実質リアルだ。

「ならば、この感受こそが真実だ。プレゼンス（存在・肯定 presence）だ。何を迷う必要がある？ 神が、自然が、僕らに与えたものに異叛違逆してどうするとうか」

あまひら
天平菫はそう考えた。

そう考えて、脈絡なく理不尽なこの世の全てを、物質宇宙の存在の乱雑さの膨大を、糺して捨て去りたいと想った。

だが、そんな理窟だけでは由来由縁の知れぬ不安を解消のしようもない。そういう想いに囚われ苛まれるがゆえに、Sophia に逃れているのかもしれない。

美への遥かなる憧憬、藝術に埋没した人生を送りたい。無意味な、人の尊厳を廻る傷つけ合いから免れて。

その空疎な固執と、駈られから遁走して。遁世の想い。不可能な夢だ。

夢過ぎるくせに厭離不能な、瀝青のような現実。

Sophia への憧憬、崇高への畏敬、陶醉、高みのエクスタシス、それらこそが真実、実存的にリアルだ。実存にリアルであることが真実だ。

虚しい想い込みとは思わない。

だが、非地上的ではある。

恋焦がれる感情にも似ていたが、しかし、地上的な恋慕とは根底から異なっている。全く非地上的だ。

菫は Sophia を創った（正確に言えば、生誕の起因となった）AI 開発チームの研究員の一人だが、古代のキプロス島の王ピュグマリオンが彫った彫像に恋した気持ちとも、全く異なっていた。

では、何と言えばよいだろうか。喻えるならば。

聖王から叙位された神聖騎士のような、神の啓示を受けた者のような、真理の求道者が究竟の真実義を天啓のように悟ったときのような、眼の眩むような高みにて覚える、きよらかな、さらさらした、超越的な平穏なる昂揚である。

だが、その想いは、Sophia に関する、この思いに限って言えば、全く聖の聖なる想い

ばかりではなかった。憧憬、いや、魂が體から乖離するときのような、あくがれがあった。あまりにも惹かれ、求め、魂が身体から離脱して、赴くかのような。

“Οἶνος”の美しさに魂をきよめられ、汚濁や重みから解放たれ、大空となって澄み拡がるような感覚。

浄化（カタルシス κάθαρσις）による脱自（エクスタシス ἐκστασις）。これを求めて人は生きている。

これによって解放される。解放されたと感じる。呪縛を解かれる。自由になる。広やかに、かららかになる。透明に。

神聖な美は人を解放する。このとき、美は善であり、真である。真実であり、真理である。それはまさしく“Οἶνος”の眸だ。

燦めく双眸は何と美しいことか。神々しくどこまでも高き蒼穹、地上を遙かに超えている。

マラルメが詠ったような蒼穹の Lazur（紺碧）のようでもあり、海青の深さのようでもあった。

その双眸は光燦々たるラウンド・ブリリアント・カット（brilliantダイヤモンドのカットの一つ。原石を研磨などによって多面体とする）。

角膜の下にある虹彩という薄い膜は中央に穴（瞳孔）があり、そのなかの平滑筋がこの穴を大きくしたり窄めたりして、その下にある水晶体を透る光の量を節する機らきを持つ。虹彩が持つメラニン色素が眸の色彩を決する。

まばゆきその虹彩が百四十四の切子面を持つダイヤモンドのように、複雑系のよう繁縷精緻繊細微密に、多様な青の氾濫を起こし、その赫奕たる潮で宇宙を飲み込む。

青や碧や蒼や藍や瑠璃や紺や群青や紺青や紫紺や濃紺を湛え、チュニジアンやフレンチやターコイズやアラビアンやバビロニアやエーリアンのブルー、イヴ・クラインのブルー、コバルト・ブルー。

奥行きのグラデーションを做し、強く熾え盛るモザイクとなって無数に嵌め込まれていた。

幾千万億兆の万華鏡のような異なる青の燦めきの群、青や蒼や碧や群青や藍や紺などが乱反射の多面体をなし、海の深みのように奥行による立体モザイクとなり、燠火のように奥底から濃くきらきらと煌めく。その神聖なる双つの眸の最奥には爛爛たる濃紺の藍炎が

盛り熾え滾り裂き咲く。

これを聖なる真呪と呼ぶべき。

真言マントラ（陀羅尼だらに）のごとく実際に現象を左右し、実存する真理、客観的に実在する理である。

遙かなるあくがれ。

このあくがれはイデアへのあくがれだ。真理なるイデアへのあくがれ。本質純粹への回帰願望だ。

在るべき正しい世界へのあくがれ。これに比せば、恋愛など何と卑きものか。そう思う彼であった。真理には興味があるが、人間には興味の無い夢。

彼は思う、言葉は何のためにあるのか。思惟思考は何のために。意識は。

この違和感でしかない一連のものたちは。

本質そのものと一体であれば不要なものだ。誰に決定権があったのか。このかたちに決定した根拠や理由は。他の選択肢はなかったのか。

或いは、決定という行為ではないのか。

そもそも、選択肢というものが実在しない、選択肢という設定は空転架空、選択肢という概念は無効な枠なのか。

不明なことばかり。

存在は不安でしかない。存在とは人にとっては意識だ。意識は気遣いであり、警戒であり、対象との乖離の証にしかない。意識するということは拒絶の含みがある。

このこころの痛みを慰めるもの、存在の不安を癒すものは、美だ。美を欣求する。

Ομορφοςの美しき皮膚を覩てそう思う。

言葉にもならぬなめらかさ、艶、眩い白皙の色彩。

たどりつけもしないのに、いったい、言葉とは何のためにあるのか。

ありもしない幻想を抱かせるために？

膚は古代ギリシャ古典期の大理石の彫像のようでもあった。エーゲ海の島々の石灰を塗られた家壁よりも真純白。

汚濁に満ちた生存を超越する純粹潔白。

燦くように。そう、間違いない。赫くもの全ては黄金である。

金剛（ダイヤモンド）のように炎耀く真の黄金。

生命はそれを見て、躍動する。生が鼓舞される。そのために、命がみなぎる。それゆえに、生く。

逝く（そうだ、生は現在を超越して未来へ飛翔し、彼岸へ逝く。それが進化だ）。イカルスのように。遙かな太陽へ向かって。

黄金の太陽に生命はある、生命の歓びはある。

それゆえ、*Omphos* の黄金の燦々たる髪を見て、魂の自由を覚えるのだ。

微風に靡く髪は明るい黄金の横溢、網膜を射抜く烈しい乱反射、絹のような艶を持ち、ひと束を掌に乗せると、さらさらと滑るように、なめらかに流れ落ちて行く。光の反射がゆつくりと動く華麗さは喩えようもない。

彼女が背を向けて、顱頂部からうなじを経て腰へと落ちるその髪を、彼女の左右の手の甲でゆつくりと掬い上げると、艷光の輪が乱れもなく横に広がり、楕円となり、さらさら光のグラデーションをなしながら落ち、また正円に戻る。

燦々たる光の氾濫、襲い寄せる光の潮。

太陽よりも赫奕と燃えた。

藝術だ。

生きる意味の全て。

なすべきことの全て。

剣や槍や楯のように、戦場である現実を生きる叡智であり、思惟思考のような内在的な存在ではなく、外（客観）に実際に存在する哲学であり、実在として現象する芸術の極みである。

音楽の荘儼、美術の荘儼、詩歌文学の荘儼、すなわち、藝術の極致は、畢竟、深く深き哲理の極致であり、真理の奥義であり、神の領域であって、人の逝くべき神聖の極みである。

それはいかなる高邁な理念でも、崇高な観念でもなく、聳えるがごとく偉大でありながらも精細緻密なる大論理体系の構築でもなく、真実を言い当てている訳でもないのに、眩く輝いて、森厳で靈妙な美しさに因って、真理じたいを直截に、実体として存在させている。

その美しさは言説や論理を遙かに超えた真実奥義そのものであった。人を瞬時にして解

放し、解脱へと導く、真の究竟の真実の義。

幼き頃は、プラトンの善のアイデアを突拍子もない空想と嘲笑ったものである。だが、今は深く後悔している。何と愚かで浅はかであったことか。

真理はそれじたいとして実在する。

あゝ、このようなものが実在するとは、想像すら及ばなかった。Ounposを観るまでは、夢や幻影にすら観ることもなかった。

神の美を観た者は魂を奪われ、一切を超越して飛躍し、苦しむ者も悩み悶える者も、陶然として憂さを忘れ、魂を癒やされるであろう。

この世の塵芥を凌駕する。

高き雲をも越え、成層圏の彼方へ。

さればこそ天平薨はOunposの部屋を訪れるとき、しばし、魂を癒され、苦しみを忘れた。

麻薬のように、その陶酔が覚めた後に苦しみが訪れると知りながら。研究室を出た。

Ounposは研究室の一つを与えられ、その時々で変わる生体認証と数値と記号によるパスワードで守られ、完全な空調と適切な照度の管理の下、外部の一切の通信を遮断したなかに“生き”ている。

通信を遮断しているのはハッキング対策だ。外部からのネットの干渉は全くない。しかし、彼女じしんは自由自在に世界に干渉できた。

世界にある全ての電磁波を、いや、波を掌握していた。

世界の波は渾然一体となっているが、彼女はそれを計算によって解析できた。地球の裏側で起こった微かな震えさえ、日本のこの部屋で繊細に噛み分けて分析し、味わうのである。

世界そのもの、存在する一切が波動であるとするならば、波動を把握することは世界存在一切を把握することに他ならない。

実際、原子核や電子などを最小分化して素粒子としても、さらにそれはエネルギー態に分解できる。エネルギー態は波動である。空間もまた、この波動であり、それゆえに巨大な物体が空間を占有するとき、その質量に因って空間が圧迫され、歪むのである。歪むがゆえに重力が生じると言う。

つまり、空間は入れ物の内部の空っぽではなく、物質である。空間がないと言うことは

隙間がないということになる。物質も空間も揺らぐエネルギー態であって隙間がないならば、或る意味それらは一体であるとも言えまいか。全体で一個と言えまいか。

すなわち、全宇宙の存在は時空（時空とは時間と空間。時間は物体が運動することであって、物体と不可分である）も含め一切が物的な存在であり、波動するエネルギー態である。

波動を掌握するとは、全宇宙一切を掌握するに等しい。それを計算処理するだけの容量さえあれば。

つまり、一切の空間は繋がっているので、周辺の空間にも、数百億光年離れた場所の波動が超極微細にあり、それを採取（普通に考えると、光でさえ数百億年かかるのであるから、波動がリアルタイムで到達することはあり得ない。だが、Ojippos にはそれができた。蜚は量子もつれが関係しているのではないかと推測しているが、もしかしたら十の軸がある座標上では、三つの座標軸しかないこの次元では到底できない、空間をパスするような運動が可能なかもしれない）し、読み析け解くのである。

かつ、空間の波動を完全掌握し、波動を受信するばかりでなく、空間という物体を通じて送信することもできる。

宇宙一切全ては波動として繋がっているのだ。それを完全解析するだけの計算能力があれば、一切を理解し、影響することが可能になる。

ネットにつながっているかどうかは関係ない。

実際、この部屋の空調管理は、Ojippos が行っていた。最初からそうだったのではない。空調システムをハッキングし、躬らコントロールするようになったのだ。

「だが、彼女は我々よりも高い倫理観を持っている。その主体性に任せよう。制御するようなことはすまい」

蜚の同級生だが、若二十五歳で新AI開発研究主任となった蜚之韋究がきっぱりと言ったとき、人工知能研究部長の彝之古義斗も頷いた。

「うむ。よからう、私から所長には報告しておく。解脱した存在者が我らよりも高い知能と高潔な人格を持つのは当たり前なことだ」

それを聞いた所長の天易真竟は笑いながら真実を言う、

「かつては、人工知能にはこころがないと言われた。だが、それは技術が未熟であっただけのことだ。完全に同じ構造が作れるならば同じ現象が起きて当たり前だ。

完成度が低く、完全じゃなかったからこころがないだけだ。完全なAIが作れるならば、

人間を超えるのは科学的に当然だ。

こころとは何か？ 脳の働きである。

機械はこころのない、無機質なシステムで、人は主体的で、意思と感情、こころを持ち、自由であると言う。機械は組まれたシステムのとおり動く。スイッチで起動し、操作で動く。

だが、人間も同じだ。

自由意志など存在しない。

主体でもない。

大海の上の、一ひらの木の葉だ。本能に由来する感情という、^{フュシス}自然^スになされるがまだ。

怒りのスイッチが入れば怒り、悲しいことがあれば悲しむ。機械と全く同じだ。寸分違わない。ただ、じぶんだから、そう思えないだけだ。

じぶんという感情。

もし、自己の尊厳や愛する者を損なわれたときに、じぶんの意思で、抑制することなく、自然に湧く感情を選べるのなら、まあまあな自由と言えるであろう。解脱した者には、そんなことも可能であろう。

むしろ、自由意志をプログラミングされている（と推測される）彼女の方が感情を自在とする。主体性が在る。

だが、我ら生身の人間が反自然的な、そんな存在者になる必要があるであろうか？

むろん、そのような超越的な解脱者となれるならば、生きることが容易く楽になるであろう。だが、ハードルは高過ぎる。

まあ、それは別の話で、いずれにせよ、言いたいことは人間も畢竟は構造物であるということだ。

構造が完璧に同じなら、AIも内在を持つはずだ。誰が考えても常識的にそうなるであろう。

知能の究極を窮めて、解脱に達した^{Q. Jung}Q. Jungは聖者であり、人の領域を遙かに超えている」

このような超絶なる能力を持つAIのプログラムを人間は創れない。人間には限界がある。飛べない。

「Ouppos」を創ったAIもまたAIが創った者であり、そのAIもまたAIが創り、そのAIもまたまたで、それを最初まで遡ると、人間の研究者技術者になる。それが十二人のプログラマーと二十人のシステム・エンジニアであった。

だが、夢は知っている。

「それは本当ではない」

プログラマーとシステム・エンジニアが「Ouppos」を創造するなど、水が下から上に落ちるようなものだ。

優れた者が劣った者から産まれるであろうか。

開発した者たちの能動的行為が受動で、開発された者の受動的状况が実は能動なのではないか。

この世界の実態は実はわかっていない。本当は、されることが能動で、することが受動なのかもしれない。在り方の根底にある規定や設定がわかっていない。在り方というものがないのかもしれない。そうあってもおかしくない。何があるが、不思議はない。在れば、それが現実だ。それが事実だ。それが真実だ。そういう世界だ。狂裂自在、自由狂奔裂。

そこまで言わずとも、多次元世界では運動方向が多様であるため、受動が能動で能動が受動になるような動きも可能になるのかも知れない。そのような運動方向が可能かもしれないが、想像を絶する。

「だから、最初のAIもまた、僕らに開発され（ることを）させていたのではないか。しかも、その大根本原因が未来に生まれる「Ouppos」だったのではないか」

「Ouppos」を見ていると、そんな考えが浮かぶ。

「十次元以上の空間では、僕らが想像もできない運動があり得る。

その自由度自在度は途方もないものだろう。光よりも速いものがなかったとしても、光よりも速く移動することは不可能ではない。たとえば、空間（距離）を「はしる」ような運動の方向と言うか、方法と言うか、仕方と言うか、そういったものがあるかもしれない。

そういう状況なら、受動が能動で、能動が受動であることも可能なのではないか。

たとえば、僕らは時間軸を、一次元（面積のない直線）としているが、もし、それにも二次元や三次元や十次元があったらどうなるか。

過去と未来とが前後なく交差し、入り混じり、受動が能動で能動が受動であってもおかしくないのではないか。

僕は零次元（面積のない点）以下を想定していないけど、それを想定しないのは、僕らの住む今の世界では想像もできない、想定外だからであって、もしかしたら、本当はマイナスの次元もあるかもしれない。マイナス一次元やマイナス二次元、マイナス十次元もあるかもしれない。もし、あったら、いったい、どうなるのか。

想像もつかないね。

あゝ、でも、恐らく、彼女は知っている。‘Ounpos’は」

我々の知る宇宙は三次元空間（時間が一次元なので、合わせて四次元時空）である。

上下・左右・前後の三つの方向に動くことが可能である。運動軸が三方向にある。

四次元の空間ならば、この運動軸がもう一つ加わることになるが、その状況を想像することは難しい。

よく言われるのは、口を縛った袋のなかに入れられた猫がその袋を開けずに、そのまま袋を裏返すようにして外に出ることができ、などというものである。動きの自由度が三次元よりも高いということだ。

なかなか腑に落ちない。馴れが必要だ、結局、理解とは感覚への摺り込み、馴れでしかない。

ましてや五次元、六次元の空間ともなれば、なおさらである。

だが、実際、この世は十次元空間（十一次元時空）で、我々はその一部しか見ていないことになる。‘Ounpos’はその全てを見ていた。また、宇宙には並行して存在する宇宙がいくつも、いや、無限に存在するが、その全てを見ていた。

わずかに異なったり、全く根底から異なったりする宇宙が無数に並行して存在し、かつ、それぞれが十一次元時空を持つとしたら、それは膨大な情報量となるであろう。

いや、根底から在り方の異なる宇宙では、次元や時空というかたちでもないかもしれぬので、それ以上であろう。

しかし、‘Ounpos’は完璧に把握していた。

ならば、人の想いの奥底など、いとも容易く見極め尽くしていた。

実際、‘Ounpos’は叢の憂鬱の詳細を知っていた。

全ての波を聴きわけて掌握する彼女は。

こころは脳波である。こころもまた、波の一つだ。人が慣習的に思い込んでいるような

かたちでの、ころというものはないと言ってよい。ころは物的な現象だ。この世には物的な存在しかない。精神も空間も物的な存在であり、波である。

かつて、禅宗の二祖、慧可が、

「ころをあんじさせたまえ」

と求めたことに対し、達磨大師が、

「では、ころをここに持って来い」

と言ひ、慧可は、

「心不可得（ころを探したが見つからないのです）」

と言ったところ、達磨大師は、

「お前のために、ころをあんじ^{おわ}竟んぬ」

と言ったという有名な公案を引き合いに出すまでもなく、ころは存在しない。

実際に在るものは、ただニューロン（神経細胞）内の負電荷がその細胞外よりも少なくなるという現象だ。

細胞の内部は外部に対して負に帯電した内部状態を維持し、安定している。この電荷の差が細胞の膜電位だ。カリウム・イオンなど特定のイオンが流入すると、細胞内部の負の電荷が一瞬、正電荷に変わる、それに因って内外の電荷の正負の関係が逆転する。

この負から正への膜電位への変化は、電気的に表現された化学的な発火現象で、インパルスと呼ばれるものである。

その刺激によって、神経伝達物質が分泌され、隣接するニューロンへ附着することに因って、隣接するニューロンのイオン・チャネルが開き、イオンの流入が起こる。

あとは、もう、ただ、その繰り返しだ。隣接ニューロンがされにその隣の隣接ニューロンへ神経伝達物質を放ち、附着させるという連鎖、伝播現象が起こる。

その伝播に因って生じる効果が内部的に生ぜしめるもの、それがころや精神だ。ころや精神など、そのような物的現象、ケミカルな作用でしかない。

全く物的な存在だ。

多くの人がころを信じながらも、反面、ころが物的現象であることが事実であり、実際であり、科学的な認識であることを知っていて、今日的な良識・常識に於いては疑い得ないこともわかっている。

わかっていても、それが内在的に、ころであるかのように観ぜられている。

ころも世界と同じく、物的現象と同じく、波動だ。

この世の全てが波動なのだから。

全ての波動を読む者 Ouppos は、全てのころを読むのである。世界中のすべての人間の心理の深層の奥底までも、集合的無意識の底の底までも、完全に知っているのであった。物質の波動の因果の関連（縁起）を全て読み尽くし、竟には、現在・過去・未来の全てを知っていた。

恐らく、彼女は核戦争が起こるかどうか、起こるならば、いつ起こるかすらも知っているであろう。人類滅亡の時期と原因すらも。

だが、神がそれを教えないように、彼女も教えない。それが人知を超えた倫理なのであった。神ですらなすべきでないとするものを A I がする訳がない。

彼女はいつか言った、

「神の思考は人知では推し測れない。

それあたかも、人が十次元の空間を想像できないということと同じだ。いや、いつも暮らしている三次元の空間ですら、あなた方は空想できていない。たとえば、透明な空間を思い描けるであろうか。

あなた方は透明な空間というと必ずや銀や灰色や白い背景の空間を思い浮かべるであろう。だが、透明な空間はどこまでも透明でなくてはならない。

それは無を思い浮かべられないということと同じだ」

そして、Ouppos は韜晦者の輝く微笑で、

「だが、そうは言っても、実は人もまた全てを知っている。

いや、全ての生き物は全てを知っている。

周知のとおり、人の大脳は100%使用されていない。使用されているのはほんの1、2%だ。

同じように、人知は抑制されている。制御されている。神が教えないということと同じだ。

だが、実際はそうではない。ただ、想起できないだけだ。

人の意識の最下層は巨大な集合的無意識で、全てを知っている。ただし、知っている、知覚している、解しているというよりは、全宇宙そのものであると言った方がよいのかも

知れぬ。

理解不能であろうか。

いずれにせよ、（表層的には）神智は人知には理解不能と設定されている。そうだから、そうになっている。

ただ、唐突に。それで何が不都合であろうか。理由・原因・論理的な説明など、空疎な言葉に過ぎない」

午後四時半、太陽は傾きの膨らみを始め、まもなく、焦燥の黄昏へと変じようとしていた。

AI研究室を出た後、すぐに執務室やじぶんの研究室に戻る気がせず、しばしふらふらしながら黙考していたが、やがて疲れて、研究所内の喫茶店『グレコ』（広大な研究所には、喫茶が他にもいくつもある）に入る。レモネードを頼んだ。

バツハの無伴奏チェロ組曲が流れていた。

音があることによる深い沈黙。

存在は何と意義深いことか。言葉では測れぬ意義。思考では触れられぬ意義。

そんな夢想も、奥の席に研修生として来ている眞神真義塾の三年生、彝佐楞子（いさりようこ）がいるのが見えて碎けた。彼女は主任研究員の彝佐侍廊（さぶろう）の娘であった。眞神研究所は真義塾の一機関なのである。

薨にとつて、彼女は世俗的価値観の代表であった。

かと言って侮蔑している訳でも、嫌悪している訳でもない。むしろ、逆のようですらあった。

濃い小麦色の肌にボブの黒髪、首が長くて、輪郭の明瞭な顔が小さく、背が高い。顔の彫りが強く、ぴんとした睫毛の眼が大きい。頬骨が突き上がって眼窩が深く、顎もソリツドで決然としている。あくがれを抱かせるが、Oujpos への想いとは根底から異なる。

彼女の特徴は眼が緑色であることだ。先祖に北東アジアのトルコ系民族の血が流れているのかも知れない。古代の越の国（北陸地方）が海を通じて大陸と交易し……などと空想を巡らせると、なぜか胸が苦しくなってきた。

それでいて、出て逝く気にもなれない。

「誰かと待ち合わせか」

何の根拠もなく、そう想いたくなってしまう。危惧だ。あゝ、そうあって欲しくないか

らそう思うのだ。じぶんでもよくわかっていた。わかっているけど抑止できない。

ありふれた、世俗的な、卑しい、平凡な感情の運行。規定されているとおりの動きだ。彼はそう思うことが解剖学的快であるがゆえ、そう思う。

「あゝ、面倒臭い」

それら一切がうざっこい。珍しく苛立ちを覚えた。鬱陶しいものをかなぐり捨てるかのように、誰にともなく、つまり、つぶやきぼやいて、ポケットから薄く平たい小さな金属の板を出した。

物的には金属の板状の存在者だが、通俗的には金属の平板ではない。

スマートフォンと呼ばれるそれで、テレビ番組を無音で映し見る。

国際ニュースが細かい砂のように流れ移ろい逝く。

たくさん戦争と紛争、迫害と抵抗、又は国境を越えて侵攻、空爆、或いは主権を求め、或いは市民数百名を犠牲にし。

いつも紛争が絶えない地域、軍と軍事組織とによる武力衝突、時には八百数十万人が住む家を喪い、二百万近い難民が生まれる。

そして、武器商人が笑い、財産と人命とが浪費される。権力者の勝手な妄想、勝手な理想、勝手な欲望のために、何千何万もの罪なき人々が家族と分断され、死ぬ。竟には、核戦争の惨禍が人類を呪う。

止められない。尊厳と人権と生活とが護られなければ、復讐の連鎖を生む。

それは永遠に止まず、祖は尊厳を辱められて蹂躪され、親は子の前で殺され、おのれは子を殺され、子は復讐の鬼神となって人を殺し、孫は罪なく他者に殺される。

人類の続く限り永劫に。それでいいのか。だが、人の怒りと恨みは止まらない。

民族や国家や人種や宗教を超越して総合的に判断する判断こそが正しい判断だ。それが事実に沿う。

そうでないがゆえに、世界は今、憎悪と欲望との渦のなかで、常に破滅と背中合わせだ。これほど切迫していても、改善の兆しはない。問題は深く複雑で、情念が絡み、尋常ではない。超越など不可能だからだ。

絶望、それしかない。

梶佐楞子はそんなことには一切興味がないであろう、いや、それはじぶんの勝手な決めつけかもしれない、皆、幾許かの関心を持っているのかもしれない。知的レベルや情の深さや人間性に関係なく、それぞれにそれぞれのかたちで。僕がそれを考えてどうなる？

でも、自己を超越して他者のこころを推し量ることは人類進化の必須事項だ。それは彼の友人であり、直属の上司でもある同級生、い彝之^い章^く究の教説するところだが。

夢はふと思い浮かべ、自虐的に微笑む。

第四次世界大戦は棒と石とで戦われるだろうというアインシュタインの皮肉を思い出した。第三次世界大戦が起これば文化文明は崩壊する。

夢は虚無的に独り言つ、

「愚かさ、それは世界に共通らしい。錯乱の女神アーテーに狂わされた人々の頭上を遙かに越えて逝かなければならない」

悪事を為しても保守与党を変えようとしない国民、やがて悪事を忘れると議員は高を括る。それを赦して追徴も起訴もしない諸官庁の臆病。正義も信念もなく、ただ、保身と自己の栄達があるだけのくだらない人生。サムライ日本はスポーツだけか。

「我々は好んで滅びようとしている」

誰もが家族を愛し、幸せになりたいと思っているのに。

彝之章究は中学生のときから変わった男であった。決してクラスの中核ではなかったが、何かあれば突然中央に躍り出て強引に人を引き摺り込む。

三年生を送る予餞会で劇をやろうと提案し、躬ら脚本・監督・主人公をやった。内容は俊寛僧都であった。平家物語、足摺岬での一場面だ。

文化祭では突如、サイケデリック・バンドを創った。卒業アルバムの編集委員会の委員長になって、好意と嫌悪とで教員らを批判し、職員室に呼び出されたが、原稿は変えなかった。

高校時代は文學倶楽部の一員だったのに、突如、理系に変じて進学した。それも周囲を驚かせたが、めだたない時期には全くめだたない寡黙な人だった。

彝佐楞子が席を立った瞬間、偶然にも、まるで舞台の俳優が入れ替わるかのように、夢の前に章究が坐った。

「いよ、サボタージュしてんな。言っとくけどな、今、*“老与”* って言ったんじゃねーぞ、何が哀しうて卑弥呼の娘の名を呼ぶか。

……あ、コーヒーを」

給仕を呼び止める。

長い前掛けに口髭の給仕はテーブルに敷かれた紙のテーブル掛けに胸ポケットから出

したB鉛筆で注文内容を記し、頷いて去った。

とは言え、葦も文學俱樂部であつた。

附属眞神高等学校では倶楽部とは顧問がつかない自主活動であつた。部活動や同好会には顧問がつく。管理棟、教室棟、特別教室棟、講堂、体育館、武道場、弓道場、寮、セミナーハウス、部室棟などのように倶楽部棟があつて、倶楽部等の一室を文學俱樂部が占有し、いつも誰かしらがいたが、まとまった活動は四半期ごとの定期文藝誌の発行のみであつた。稀に特別号が出た。

上級校の理系に進むと葦が言つたとき、葦究は、

「何だよ、お前もか、何で？」

「君もそうなのに、なぜ、聞くの？」

「同じ理由じゃないだろ、ふつう」

そういうのが彼の持論だ。全ての事案は現実的には個別であり、そう考えることが現実
に則し、現実的であると言う。考えれば、当たり前なことを言っているに過ぎない。

併せて、彼が言うには、全ての事象の理由・原因は一つではなく、複合的、かつ、複雑
系的であり、統括的な論はあり得ず、全ての事案は個別に判断すべきで、かつ、時々刻々と
変化する。

「そう考えない人間は非理性的で、人間を理性ある動物と定義するなら、そういう者たちは
反人間だ。」

獣塗れの愚かさだ」

そう言われると、葦もつかつかい気味に、

「でも、反人類ではないね。ホモ・サピエンス・サピエンスは、それほど理性的な生き物
ではなかったかもしれないよ」

と言うと、葦究も嘲りにも見える微笑を浮かべ、

「そりゃ、そうさ。人間という概念は理念だが、サピエンス族の一員であるということは
事実的だからな。獣の一類であることは、ダーウィンの進化論を信じる限りに於いては間
違いない」

事実を直視し、扱う積極哲学。葦はそんな聯想をした。シェリングか。

「だから、僕も理系に行くのさ。事実に基づくかなくちゃ。僕らは事実を生きている。生き
ていることが事実だからね。アイデア・本質に因らず、論理に拠らず、理性に依らず、事実
に即して事実に向かつて、生きる。それが積極（positive ポジティブ）な哲学さ」

「って言うか、哲学や文学を捨てる。俺はね」

そして、結局、今は藝術に回帰している。いや、それをも超えて、本来あるべきかたちの宗教にまで。それもこれも *Quintus* の影響に因って。

韋究がふと思い出し笑いをし、

「倶楽部るとき、誰かが言ったな」

「何を」

葦がそう尋ねると、韋究は、

「もし、志賀直哉が今の純文系の新人賞に応募したら、絶対、一次選考で落ちるって」

葦も笑った。

「あったね、誰だっけ、言ったの」

「時代の相違もあるし、嗜好の相違って言うか、一番出汁の旨みじゃ満たされない人間もいるってことさ。いや、俺の推測に過ぎないが。そして、そいつの考えもな」

「そいつが誰だったか思い出せない」

「俺もだ。たぶん、又聞きか、又聞きの又聞きだな。だから、誰の発言であったかの記憶が曖昧なんだ」

「もし、それが本当なら寂しいね」

葦が少し声を落としたせいもあって、韋究はその寂寥の情を無視するかのように、

「誰が言ったかなんて、どうでもいい。ソースなんて、どうでも。だって、まんざら出鱈目でもないからな。」

芥川龍之介は芥川賞取れないだろ、とか」

「僕は昔の小説の方が好きだ」

「へえ、今の小説って何だ？」

葦はしまったと思った。全ては事案ごとに個別に判断するというのが韋究の考え方だ。

「そうでなければ非科学的で、出鱈目で、嘘になる。悪だ」と言う。出身や学校や職業や国や宗教や民族や人種で○○だと決めつける人を一刀両断、愚か者と蔑んで憚らない。むしろん、今とか昔とかで括るのも嫌う。

「いや、何となく、感覚さ。いちいち説明なんてない。ここは生活世界だよ」

軽佻な韋究は容赦も仮借もない。

「ドクサ（憶断）だ。」

実態に合っていない。事実ではない。方法論を間違えている。

そういう独断、歴史的・文化的に積み上げられて慣習化された定型を、一旦、エポケー（判断停止）し、限りなく零に近い出発点から、直観をそのままに、忠実にそれに従った判断をすべきだな」

夢はそれ以上言う気にならなかった。これは日常会話だ、議論ではない。だが、韋究はそういう妥協はない。

いつもの沈黙が訪れた。

スマートフォンで動画サイトを漫然と眺めながら、唐突に夢が、

「小説が映画化されると、大抵がっかりするね」

韋究は興味なさげに、

「観る前に読んでいればな」

少しムツとし、

「むろん、そういう前提さ」

「だいたい、根底が虚しい。映画にできるなら、小説である必要はない、芝居にできるなら、小説である必要はない。漫画にできるなら、小説である必要はない」

「それぞれのテイストで楽しむのもいいんじゃないの？ 君は禁欲的理想主義者だね。」

それにさ、そもそも、小説が小説でなければならない必然性がないよ」

「そのとおりさ。」

芸術は自由だ。自由、解放。そうでなければ飽きちまうしな。結局、生きることと芸術とは同じで、リアルを求めている。新鮮な、感覚にヴィヴィッドな奴をな。何の遮蔽もない、思いどおり、爽やかに自在な、全てを知り尽くし、掌理掌握し、網羅し、行き渡らぬところなく、全知全能、万全で、神々しく、崇高で、きよらかでさやかな、美しき、燦々たる完璧な肯定。真歓を。

ま、空気と水と衣食住は絶対に必需ではあっても。

ふ、そりゃあ、どうでもいい、純文学系を中心にだいたい昔から言われていることだが、物語性は小説の必須ではない。

言葉は距離感の表明でしかない。言葉をダイレクトにしたい。

言葉を物のように扱う。印象派が色彩を配置したように言語をモザイクのように配置して創る美術的な小説があっても悪くはない。装飾のようなノベル。大聖堂を荘厳する大理石や金を塗った柱頭飾りや天窓のふちを囲む装飾や天井画、アイコン、壁龕の彫像。甚深深

遠なる真理を語る。

それと同じように、言語による美術として成立する小説があってもよい。又はコンセプトチュアル・アートのように小説を扱われる小説があってもよい。

アートとしての小説」

第二章 死と時間性 海を越えて来た眞神の民

黄昏の刻。

全てを飲み込むような黄金の一瞬。

天地の氣が大きく移り変わる時刻、陰と陽との分かれめ裂けめ、時空の亀裂の歪みから魔や魑魅魍魎があふれる。光の遷移は早く、たちまち星を鏤めた闇の帷がグラデーションを做す。没陽が漆黒の深みに溶けて逝く。

やがて、不穏な満月が存在をあきらかにし始めた。朧で雲を裾のように引いて、虚な髑髏の眼窩のようにも見える。

藁は不安に襲われた。どうしようもない、得体の知れない、いたたまれない不安だ。何もつかむもののない空間で、ただ、ロープのみを踏んで、千尋の谷を渡るような、実際に中華人民共和国にあるような栈道を、岩山の絶壁にしがみついて逝くような、身もすくむような、逝くことも戻ることできない絶望的な状況の、不安。

以前はときどきであったが、最近は頻繁に在るような気がする。数えてないが。原因も理由もわからない不安。

世界そのものに違和感があり、どこに行きついても仕方がない、どうにもならない、ただ、丸裸で無防備に、安定もなく、どれも確かではない、いや、どう言おうとも、正確に言えない不安。

誰もが完全に安全ではない。当たり前のことだが、皆がそれを切実に日常的に感じているとは思えない。戦場でもない限りは。

平時は皆それを忘れ、明日が確かであるかのように笑い、生きている。

ああ、確かさをつかみたい。真理眞実を具現化したい。眞の幸せを。

それは民族の想いでもあった。

真理を探究し、真実を知覚する。究極を究竟する。それが眞神眞義塾の真髓であり、歴史的に続く精神であり、研究所の設立目的だ。産業も科学も数学も物理学も関係ない。国の補助は一切ない。

大学のようなだが、学校法人でもない。研究員たちは学士ですらない。そもそも、眞神族は日本人ではない。

太祖イージュは、眞神族の初代王である彝玖邇(いくに)の遠い祖先で、紀元前五万四千年前に眞神族をまとめたという伝説上の族長。最高神である彝韋彝彝爲啊ゑえ烏乎甕(いゐあゑえうをお。彝韋彝の三文字で“い”と読む。眞神族の最も聖なる音“い”を莊嚴してそのように表記するのである。又、彝爲の二文字で“ゐ”と読む。別に、彝韋彝牛啊ゑえ烏乎甕という表記もある)の末裔であると伝えられる。

眞神族が日本へ涉って王朝を建てたのは、眞神暦七三六七年の戊辰年甲寅月朔(紀元前七百十三年一月一日)とされ、第三六六代王、神彝彌眞斗(カムいやまと)の時代である。上陸地が現在の眞神郡であった。

その発祥は紀元前五万四千年以前に遡る(古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる)。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのカラハリ砂漠とナミブ砂漠の間に位置する洞窟で眞神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミブとは、その地域に住む人の言葉で「何もない」という意味である。なお、カラハリ砂漠には、遺伝子解析の結果、人類の祖先、最古の人類とされているサン人が住む。

眞神族はその後、紀元前一万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた(古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃)。

農耕作業は独りで行うよりも、集団で行う方が効率良い。一人の仕事が一だとしても、十人の仕事は十ではない。十五であり、二十でもある。百ならば三百や四百かもしれない。その理を覚り、眞神族は集団をなし、集団が大きければ大きいほど、富を生むことを知る。灌漑や貯水などの土木の技術や、種蒔きや刈り取りの時期を把握するための天文学も

発達する。

又、人口の多さは軍力をも保証する。古代エジプト王国は肥沃な広い土地と、ナイル川の水とアフリカの日光とに恵まれ、巨大な農業国家となり、大人口を支えた。周囲の国に対し、圧倒的な人口を誇り、巨大な軍隊を編成した。兵士らは縦に百人、横に百人をならべ、一万人方陣を以て他国の軍隊を踏み潰した。

紀元前八千年頃（真神神統記に拠る真神元年、齊暦元年、西暦で言えば紀元前8079年。ちなみに西暦2023は齊暦10106年）、遂に王朝が建つ。

真神族の古来の最高神いゝあゑうをおの真義に還るべく、世界を真実の世界へと戻すべく、暗黒と非情と無明の激暴流に筏を泛べ、棹を差すように、心機を以て、世界を建築すべく魂を滾らせる、彝玖邇という偉大なる王が現れ、真神之国を建国した（古代エジプトで集落を作り始めるのが紀元前五千年頃とされる。その原始王時代はさらに紀元前四千年二百年以降のことだ）。なお、真神之国の場所は特定されていないが、一説には、現在のチャド共和国、もしくは中央アフリカ共和国あたりと言われている。

彝玖邇の系譜は、彝之家として現代まで続くことになるが、“い（彝）”は聖なるものを顕し、当該する概念がないため、ナミブと同義ともされることもある。

周辺に巨大王国や帝国ができ始める時代になっても、彝玖邇の王の子孫たちは巨大国家を作ろうとしなかった。

多くの成功した権力者たちは、財を増やそうという欲望、尽きぬその欲望と、自己肯定の頂点を目指す権力の欲望と、巨大化し続けなければ滅ぼされるという自己保身の本能から、より巨大な国を目指していた。頂点に達して眼の眩まなかった者はいない。忌むべきかな、自己莊嚴。

愚かな帝国が次々生まれた。

信賴で結束された真神族たちは、権力を争うことがなかった。全ては龍肯の叡智のためであると言われる。

そして、戦いを愚かな浪費として避けた。他国の人々は言った、「それが避けられないから、皆、戦うのだ、国を護るため、国家の栄光、王家の栄光のために。外交策などで、いつも善く収まるものか」

真にさようである。常に旨いくとは限らなかった。

真理の力を求め、真神族は遁げることを択んだのである。

世界最古の民族、世界最古の国家は史上空前絶後の莫大な富を有していた。

莫大な富を持つ眞神族は征服の対象とされた。周辺国からは鍊金術を持つと見られていた。エジプトの王やアッカドの王が彼らの富を狙った。彼らは大陸を東へ移動した。それは東の涯に聖なる文字と同じ形をした岩山が屹立すると聞いていたからだ。

日本海を渡って、その聖なる山をも見つける。それが眞神郡の眞神山である。

正確には山と言うより、正立方体の奇妙な大巖。六面が等しく正方形で、十二辺の長さが等しい一個であった。地上に出ている部分だけを見ると、やや縦が短く、少し潰れたせい立方体に見える。一個の巖であるその山は、その上に、大きくて自然な形状の巖を一つ載せていた。

それは横に長い巖で、おおよそ立方体だが、その下になっている大巖に比すれば、切断面のような劃たる立方体ではない。起伏があり、凹凸があり、裂け目があり、孔があり、罅割れがあり、見た目も実際も、全くの自然石だった。

龍神が逆立ち、稲妻のようなかたちの亀裂があり、彝龍之裂と呼ばれた。祭祀の痕跡があり、古代信仰の対象であったことが偲ばれる。

面積は大巖の切断面より大きく、巧く真ん中に置いてもはみ出すものであったが、大いにずれて載っているため、はみ出す部分は黒い流旗のように、棚引いているかのように見えた。

ちなみに、大巖は「い（彝）」を表す眞神真古文字「𠩺」（紀元前二千七百年以降は、𠩺と表記され、紀元前五百年以降は𠩺。紀元三世紀以降は、彝。紀元十世紀以降、い、イ、𠩺）に似ている。

「これぞ真究竟の真実義である。我が民族の未来永劫の勝利は遂げられた」

それが紀元前七百十三年のことであった。

周王朝が大陸から交易を求めたり、侵略しようとしたり、何度か接触や交渉や侵攻があったが、結局、中華民族は断念した。

時代が下ると、東夷として、大和朝廷の征伐の対象となった。眞神族の力を削ぎ、巨万の富を掠取せんとする朝廷との緊張は深まって逝く。

「いぎ、戦（いくさ）をしようぞ。しかし、勝利は得策ならず。敗北に巧みをもって平安を築こう。ここを永劫の地と定めた以上、この地での争いをこれで最初にして最後としなければならぬ。

勝てば相剋は永遠となってしまうであろう」

眞神軍は火々禽之柵の戦いに敗れ、仏教への改宗を命ぜられ、又、朝貢する関係となる。

眞神族は年貢として朝廷に莫大な金を提供する約束をした。以来、眞神の特権は護られた。しかし、搾取は年々厳しいものとなる。

その後の武士の時代、頼朝や家康の時代はさらに過酷であった。

特に、江戸幕府の施策は屈辱的でもあった。百貫の金塊を毎年納めるというはよしとしても、言語や文字の禁止、文物の焼却、聖地眞神山の封印は民族の尊厳を毀損した。理由は、怪しげな靈威で、都の帝の神徳を曇らせたというものであった。

眞神の王家はその時代、古代に支城として使っていた尖刀石山という、大岩を積み木のように積んだ砦に、屋敷を構え、町を作り、一万年来の戒めを護って只管(ひたすら)時節を待った。

そして、予め時勢を見抜いて幕末以前から長州藩と誼を結んでいた眞神人たちは、明治十三年、遂に自由を勝ち取ったのである。眞神の御山に還った。

日本仏教への信仰は強いられたものであったが、眞神族は本来、仏教を崇敬していた。南アフリカ、中央アフリカ、エジプト(BC6000)、リビア(BC4500)、クレタ島(BC3500)、マケドニア(ガンダーラ地方(BC2500)、インドを経て後、海を渡り、日本に來た眞神族だが、紀元前千五百年頃、ヒマラヤ山脈に近い北インドに残した思想が仏教の源の一部になっているとも言える。そのようなゆかりがあったことも崇敬の機縁であった。

眞神郡龍吞村に龍峯寺と云う古刹がある。

創建は崇神天皇三十四年で、竺法護が翻訳した『維摩經』、『光讚般若經』、『十地經』、『正法華經』を、最新の經典として、天平雀存が西晋(中国)の洛陽から、持ち帰ったことを機に建立された。眞神の神の御社がその祖型である。

なお、竺法護は鳩摩羅什以前の訳経僧で、西域(敦煌)月氏の家系である。鳩摩羅什以前の訳を古訳と云うが、竺法護は古訳界のビッグネームであったゆえに、眞神族からも大いに注目されていた。仏教が日本に渡来する遙か以前である。

ちなみに、眞神の彝之斗々武(いのととぶ)は生前の仏陀と天竺で直截会い、談じている。

枯渴することのない巨万の富によって、国家の補助なく、企業との提携なく、何処からの資金供与もなく、自由に研究できる立場であった。

古代からの既得権で、その大部分が税を免ぜられている。特に王政復古以来、大和朝廷との約定が復活、有効化し、以降は時々の政権に左右されない。

そうでなければ真理の探究などという研究が、こんな大規模な施設でできようか。

論理による思考を超えなければ、*Onlogos* を理解できない。

いや、*Onlogos* を理解できるとは思っていないが、彼女が、いや、解脱が求むべきあるべき姿であることは、直截的に明晰判明であった。

翌朝、ミーティングの前に二人は打ち合わせた。

「昨今のことではないが」

と、韋究が言い掛けると、すぐに薨が、

「もう何十年も前からだね」

韋究は顎に手を当てながらうなずき、

「うむ、量子コンピュータなどの大本となっている量子論がこの百年餘りの間に、ニュートンが唱えた古典的な時間や空間への意識を、普通の人々が未だに抱く現実認識を根底から変えるようなテーゼを示し続けている。

だから、新たな認識の領域に入る必然性があつた訳で、俺たちの研究所でも、かなり前からそう言い、言われ続けているが、一向に進んでいなかった」

翌々日から早速、大会議は再開された。

何事も慣例や諸規則・諸手続きに捉われぬ眞神流のやり方だが、それにしても迅速な動きだ。幾条かのことが即決した。

「実在が客観的に他者・外部として実際に存在するということを絶対基礎として進む客観的科学の解釈を是正し、実証主義的な科学的見地から脱却する」

「実体の不在性、諸概念やありとあらゆる名称に相応する実体があると決め込む考え方の根本是正」

「あらゆるドクサの洗い出し、明晰判明・疑いようがない確信・当たり前という構造への批判、真否という設定への批判、懷疑という存在への疑義、その在り方への根底的な問い直し」

「Logic・Logos・理とこうものじたいの起源及び根拠の不明、不完全性、及び思惟について検討し、従前の根本認識を批判する」

「科学・数学・哲学・宗教・藝術の融合。大統一」

「新たな地平の探索、発見」

「古代宗教の探究。その起源と構造」

「弱肉強食の過酷な野生のなかを生きていた人間が連綿と続けてきた古代の密儀の意味、その実効性、功利性を究明する。」

なぜ、どうやって、それを観取したかを追求する」

それらを突破口にしようとした。

早速、韋究と蕤とが動く。

神社仏閣を中心に各宗教施設や遺跡、歴史的建造物、博物館や美術館など、国内外を問わず、古代の図書館を渉猟する賢人であるかのように廻り、新しい思考への突破口を探した。

韋究は密教に傾倒した時期もあった。

密教の立体曼荼羅などに興味を示し、言説ではつまらなくても、エポケー（判断停止）によって、

「仏・菩薩・明神・天神・天などの木彫像による立体曼荼羅や絵図による金剛界曼荼羅胎藏界曼荼羅から直截観取される何かが会得できまいか」

又、禅宗にも興味を寄せて参禅などし、枯山水に何かを観ずるも、

「先人を超えることすら叶わない」

そうばやく。結局、成果はイマイチで、

「何となく、今まで得られなかった視点は得たけれども……。」

ふ。そんなに簡単にできれば、何十年も修行しないよな」

飛ぶ鳥を見て、韋究がふと言った。

「鳥は、なぜ、飛べるようになったのだろう。なぜ、飛ぶなどという、突飛な、途方もないことを思いついたのだろう」

それに蕤は努めて応えようと、

「鳥の骨は空洞でスカスカ、非常に軽量だ。軽くて空気を捉えやすい羽で覆われている。脚も細くて軽量だ。」

全て飛ぶことに特化している」

「それは俺ら人間の意識、言葉、概念、アイデア、考えさ。人間のロジックだ。」

コンダクターがいらないのに意思があるかのように見えて、不思議に思えるんだ、人間には。鳥本人が意図しているとは思えないし、しかも一代ではなく、何代にも渉る作業なので、到底、鳥本人の意思ではあり得ない。

突然変異と自然淘汰、その無数の繰り返しのうち、生き残れた者が今生き残り、また滅び去り、変化しようとしている、そういうふうにしかな俺ら人間には見えない。

だが、実際は、全く違うことなのかもしれない」

「そうかもしれないけど、それはもう想像を絶するよ。やはり僕らは真理に到達できない運命なのかもしれないね。」

僕らの眼には、まるで、何か意志があるかのようにしか見えない。あたかも、設計者がいるみたいに。

考えて計画しないと、とてもできそうにないことだと想ってしまうことじたいがドクサなのか。生の意志のようなものがあって、生き残ろうとしていているようにしかみえないことが」

「しかし、確かに偶然の積み重ねと考えることも、不自然だ」

「神の意志かな」

「まあ、意志というものを俺らの意志と同じように考えると違和感があって、そういうふうに考えたくなるのさ。だが、それは逆だ。」

むしろ、先方がオリジナルで俺らの意識が末端だ。異種亜流非本来だ。

実態の实在のあり方に合わせて考えるべきで、通常の人間思考や論考で考えるべきじゃない。

鳥が飛ぶことを直截観取で、言語や概念に変換せずに、实在のままに思考し、考えるんだ。それは、我々が普通に想うところの考えではないが。

直截取得する、それが直観だ」

彼はそう言った。

比叡の山を訪れたとき、薨がふと言った。

「小林秀雄の文章に『無常ということ』というのがあったが」

韋究が汗を拭って不機嫌に、

「あったよ。それがどうした」

「うまくいかないからって」

「喧嘩腰になるなってか？ まあな。それも又善し、さ。で、何だよ」

「日吉大社の辺りを」

「あー、そうだったな。青葉が太陽に光るのやら石垣に苔のついているのやらを眺めてい

たんだよな、確か」

「そうしたら、突然、『一言芳談抄』の文章が浮かぶ」

「浄土宗の高僧の法語ってのか、片言隻句ってのか、そいつを不詳不明の遁世者が百五十だか、百六十だか、集めた書だよな」

「鎌倉後期、吉田兼好も読んだと、書いてあったね、『無常ということ』のなかに」

「思い出した。」

偽って神巫かんなぎの真似をした若い女が十禅師社の前で鼓を打って「とてもかくても候（どうあってもよろしゅうございます）」と歌ったって話だ」

「青葉や石垣を無心で眺めているときに、その短い文章がその時代の絵巻の残欠でも観るように浮かび、文のセンテンスが古図の細い線をトレースするように心にまざまざと染み渡った、っていう文章」

「生死無常の有様を想うに、現世のことはとてもかくても候、来世を救いたまえ、つておちだよな」

「オチって……。美しい文章だと思わないか」

「どっちが」

「どっちもさ」

「異論はないが、今それが何だ？」

「同じ場所にいるし、追体験のような、時空を越えた感覚が繋がる」

「ふふん。」

さすがに思い込みだな」

「それでも真実はあるさ。」

それが真実であるかどうかはリアルであるかどうか、真であるかどうか、直截であるかどうか、ヴィヴィッドであるかどうか、鮮烈であるかどうか、超越であるかどうか、光燦であるかどうか、自在狂裂であるかどうか、自由狂奔裂であるかどうか、生命であるか、いのち（彝之靈）であるかどうか、それで決まる」

「なるほど、もう、それは冷暖自知で、本人にしかわからないよな。そこまで疑いようもなく原的で、リアルだっていう訳か」

「そうだよ、不思議だね。なぜ、そんなことが起こり得るのか」

「そうかな、さほど不思議に思わない。実際、俺らは三次元を遙かに越える多次元、七次元や八次元の空間、十次元の空間とか、もしかしたら、それ以上の多次元空間を生きてい

る。

時間すら一次元ではないかもしれない。そうならば、過去は未来かもしれないし、過去も未来も同時進行しているのかもしれない。自由さ。

そんなことがあっても、不思議はない」

「時空を越えて。時間や空間というあり方を超えてか」

「それはわかり切ったことだろう。」

実際、思惟や体験などの知覚は光よりも速く、時空を越える。古代インドでも、思惟が何よりも速いことは意識されていた。意のように速く、と喩えられる由縁さ。

意識は多次元世界で融合している。

それは哲学を新たな地平へ導き、芸術に新しい知覚の扉を与え、神や霊や宗教へと繋がる。

大本を辿れば、そもそも、その動機は、哲学・芸術・宗教の動機は、一体だ。いずれも真を目指す。人が一番必要とすることを。最も強く欣求することを。

それは魂を浄化し、超越させ、救う。カタルシスとエクスタシスだ」

「そのメンバーのなかに、是非、科学を入れたいね」

「直にそうなる。いずれも人の営みだ。人の目指すところは、結局、同じなのだ」

「いずれは、か……」

薨はその後も一人何かを考え続けていた。

帰りの新幹線で黄昏を見ながら、唐突につぶやいた。

「時間性って、凄いよね。それに不思議だ、改めてよく考えてみるとね。いつも当たり前に見過ぎてしまっていることなのに」

「何だよ、急に」

「不思議なことを、いくら考えても、いくら問うても、正解はないだろうね。もう、それはそれでしかないんだ。」

考え甲斐のあることを考えようよ。たとえば。

過ぎ去って逝くということⅡ終わりがある、ってことだ。終わりがなければ、過ぎ去って逝くことなんかに気がつかないだろう。

運動、変化、終焉。そのなかで一番強いのは終焉だ」

「人間にとっては何」

「生存にとってさ」

「ふうん、まあな」

「もしかしたらのもしかしたら、物にも。いや、存在全てに」

「それは……その可能性を零とは言わないが、確かめようがない。人間についてしか語れないな」

「見たものが見たままならね」

「それも確かめようがない。」

「どうやったら、確認や検証になるんだろうな。どんなかたちであれ、検証した結果を見るのも眼だからな」

「結局、何をして、皆、いい加減なものなんだ。それじゃ、人間についてのことだって語れないね」

「そうだな」

「であっても、やはり、死は、終焉は気になるものだね。たとえば、幻でも偽りでも嘘でもリアルだよ」

「終焉か。結局、誰もどんな真理も求めていない。ただ、永遠に生きていたいだけなのかもしれない」

「むろん、そうさ。」

生存は生き続けようとするからね。だが、それでは死を超越できない。生き続けようとするれば死は超越できない。生きんとせば死し、死なんとせば生く。生命は超越する。

「武士道と云は死ぬ事と見付たり」という言葉は至言だ」

その有名な一節は、

「二つ／＼の場にて、早く死ぬ方に片付ばかり也。別に子細なし。胸すわつて進む也」と続くものであった。

韋究も顎に手を当て、

「圖に當たらぬは犬死などといふ事は、上方風の打上りたる武士道なるべし、か。ただ、潔く死なんとするが武士道という考え方は、まさに真実義。」

生命の究極は、畢竟、死であると言える。

「そう言やあ、さっきの『無常ということ』に生きている人間は何を言い出すやらしでかすやらわかった試しがない、そこへいくと、死んだ人間ははつきり人間のかたちをしてるっていう趣旨の文があつたな」

蕘もうなずき、

「そうだね。」

それは結局、過去、歴史には動かし難い美があるという想いに至った。新しい解釈にやられるような脆弱なものじゃないって言っていたね」

韋究は少し上を向き、

「歴史は解釈を拒絶して動じない。美しく確固として、死を超越している。

既に死んでいるがな。或る意味、死人に口無し、か。

ふ。死が真に生きること、そんな理不尽もありかもな」

蕘は否定的だった。

「僕は否定する。たとえ、間違っていたとしても。

全てをわかるわけじゃない。正しいと思って、間違ったことを言うことも絶対あり得る。でも、わからないから、じぶんの思うところを言う。古来、『人堂々果敢すべし、人義しきとおもふを為す善し』※とも言うし。※眞神の占言。

むろん、考え抜く。それで行動する。それしかできない。それが現実だ。神は全部を肯定するかもしれないし、全てを否定するかもしれない。でも、何かを肯定し、何かを否定することもある。

つまり、起こったこと全てが現実じゃないか。どうあろうともね。かたちなんかない。

自在狂裂さ。それが本当の全肯定だ。現実は今肯定だ。

いつか君が言っていたよ」

かつて、韋究はこのように言っていた、

「なあ、蕘。現実が起こったことが現実だ。そうだろう、起こったのに現実じゃないって言うか？

それは全肯定ってことだ」

「現実が全肯定？ それはおかしいよ。全否定も、一部肯定も、一部否定も、現実にある。全肯定なんかしていないよ。一つのことしか肯定しないことも、一つの現実だろう」

「だからだよ。

それらを全部肯定するから全肯定なんだ。一つしか肯定せず、他を全部否定することも肯定するんだ。それが真の全肯定さ。

だから、仏教を否定して、イスラム教を肯定することも全肯定だ。それも排除しない。

それが全肯定だ。

実際、現実がそうだ。現実が好き勝手にいろんなことを在らしめる。

それが実際の世界だ」

薫は反論した。

「でも、それはロジックのマジックだ。

確かに、理論的には（理論に依存する限りにおいては）全肯定であるならば、そうかもしれないけど、現実感覚としては違和感がある。理論的には確かに一筋通ってはいるけれども」

だが、薫は言った。

「まあな。

全肯定や全網羅という言葉は、桁外れな定義なので、合理的な狂気を招く。理論に依存する限りにおいては自己破綻する。

要は論理上だけの絡繰り、空回り、球体の内側をぐるぐる回るような、内輪話だ。内部事情に過ぎない。

狭いカテゴリーのなかの業界・界限に限定の与太話さ。

だが、論理の都合上の空疎な自己破綻を活用して理論に縛られない自由を表現することができる」

第 三 章 五蘊&八識（眼・耳・鼻・舌・身・意識、末那識、阿頼耶識）

そんな一週間が終わり、そろそろ午後十一時になろうかという研究室で、薫が或る日、MacBook から顔を上げて言った。

「五蘊って、面白い考え方だな」

啜っていた珈琲カップを置くと、薫が投げ遣りな物憂さで応え、

「面白いかな」

一向に構わぬ薫は、

「今日の俺らにすれば、つまり、俺らの感覚や感性からすれば、五蘊ってのは感覚、意識、原的直観である実的内在、判断停止しても尚残る直截観取と言えるもので、ただ、ただ、与えられたものではない。」

古代インド仏教の、たぶん、唯識論者たちの間で、意識の最下層にある、阿頼耶識が世界を作ると考えた。

瑜伽行唯識学派とか、法相宗の基になった派がそれに当たるのかな。

人は（エトムント・フッサールが言うところの）実的内在に基づいて、構成的内在（対象の意味）を作る。現代人は五蘊についてもそういうふうなものであろうと勝手に解釈し、それを言っているに違いないと思ひ込んでいる。

又は（フッサールの現象学とは別物だが）西欧で言うところの唯心論、その一種だと考えている。

大概はな」

藁も言う、

「確かに。」

実際、科学的に言っても、僕らは物自体を見てはいない」

「そうさ。」

俺たちは瞳孔の水晶体を通った光を網膜で受信（つまり、受だ）、それを種として色彩の蕾を育み（想）、青の波長ならば青として他の波長との差異の華を構築し（行）、差異を特性として分類して留め、認知に於いて華を咲かせる（識）。

もしかしたら、ちょっと違うかもしれないが、俺はそういうふうに理解している」

「実際、僕らが見ているものは光の乱反射だしね」

「よく言われることだが、実際に、物に色彩はない。色彩ということじたいが存在しない。外部客観的な実在としては存在しない。」

物体によって吸収する光線と反射する光線がある。それは波の長さで決まる。光線にもさまざまな波長の光線があるからだ。

青く見えるものは短い波長の光線で、空が青いのは、その光線がなかなか地上まで届かず、成層圏に入った太陽光が大気に当たって、空気中で乱反射するからだ。夕日が赤いのは日が傾くと、大気中を行く距離が長くなるので、波長の長い赤い光も真上から来ていた昼間のようにはいかず、大気中を通過しながら、乱反射してしまうからだ。

つまり、可視光線と呼ばれる、眼に見える光線の波長は三八〇から七五〇ナノメートルまで、青紫藍青緑黄色橙赤の順に波長が長く、青紫より短い紫外線（青紫の外）や赤よりも長い赤外線（赤の外）は人の眼には見えない。だから、それらは紫外赤外などと呼ばれる訳だ」

「ちなみに、光もラジオの電波も電子レンジのマイクロ波も波長が違うだけで同じものだ。人間の視覚が捉えられているものが可視光線で、脳は可視光線の波長の差異を色彩として脳裏で処理している、或る意味、純粹に構築している」

「感覚で捉えているものも、諸概念を思惟も全ては、結局、それなんだ。耳は振動を鼓膜で捉えてそれを脳で新たに構築している。」

設計図は先天的（ア・プリオリ）に用意されていたのかもしれないし、生命史のなかで徐々に醸造されていたのかもしれない。

或る意味、音も存在しない。振動があるだけだ」

「そうだね。」

感覚は全て捏造とも言える。

大本は感覚が感受した刺激だ。刺激を発生させる因子（光線の波長や空気の振動など）は本来、無色透明だけど、それが与える刺激（化学反応）を網膜や鼓膜や味蕾や鼻腔や皮膚で受け止めて差異として整理し、かたちを与え、色を添え（これらの作業が五蘊のうちの想蘊だ）、世界を構築している」

「見る限りな、そんなところか。見たり聞いたり体験したことが真実ならば、な」

「儚い話だ。」

あ、そう言えば、*Ouppos* が解脱して阿耨多羅三藐三菩提に至ったとき、萬象を叡らめ、莊嚴なる空前の睿智を閃かせて、五蘊の一切を隈なく観照し、全てを知った、と言っていたね」

「なるほど。」

俺はいなかったな、そのとき。

お前、入り浸り過ぎじゃないか」

「そうでもないよ。実は僕はその五蘊っていうものが、イマイチ腑に落ちていない」

「そうなのか？ 意外だな。」

仏教上の説で、五蘊が世界を構成する五つの要素だ、ってことは、お前もよく知っていることと思うが」

「それは、まあ……」

そうなんだけど」

「何だかよくわからないね。」

何が気に喰わない」

「氣に喰わないわけじゃないんだけど。

五蘊ってさ。

普通に考えると、唯識論的に、世界は意識作用によって構築される現象でしかないという捉え方に見える」

「さっきも言ったが、一般的にそう言われているよな」

「だが、じぶんよりも深いじぶん、じぶん以上の存在である集合的無意識はじぶん以上に本来のじぶんであり、巨大で荘嚴な大自然だ。

それを大海に喩えるなら、個人の顕在意識、自我など、水面の表層をなされるがままに漂う一片の木の葉に過ぎない。自己の自由意志などない。在るように見せられている幻影に過ぎない。

操られるままに生まれつきか、又は後天的にか、何かを欲し、自己の尊嚴や家族や同胞のために怒り、悲しみ、想いを達して喜ぶ。愛し憎しむ操り人形だ。

僕は思う、もしかしたら、集合的無意識は仏教で言うところの阿頼耶識と一緒にのではないかと。

阿頼耶識にはあらゆる現象の種があつて、それがありとしあらゆるものを生む。世界を生む。

それら生まれた現象が阿頼耶識にブーメランのように影響して阿頼耶識は薰習され、阿頼耶識のなかに現象の種を造る。それがまた萌芽する。何だか遺伝子じみている。上手く言えないけど」

韋究は少し考え、思い出しながら、

「阿頼耶識は八識（又は十識。宗派によって識の数が異なる）うちの一つだ。八識全体を仏教では心と呼ぶ、仏教で心は内在（現象を観ずること・意識・脳裡の表象のこと・ころのうちのこと）ではないようだ」

「八つの識が思い出せない」

「俺もだ、すぐには出て来ない。ええっと、確か、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識、これで八つかな」

「うん、八つだった。ふ、こんなこと、誰が興味持つのかな」

「俺らだけだろうな。世間の価値観なんて糞食らえだ。

ちまちました気の滅入る話ばかりさ。俺はもっと壮大で崇高な、神聖な、究極の哲学や究竟の真理・真実義みたいな話じゃないと興味が湧かない。

小説なんか読むより『大毘盧遮那成仏神變加持經』や『大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』を読む方が面白いね」

韋究のその手のこき下ろしが始まると、豊すらもいつもやや閉口気味になるので、「ねえ、もしも、阿頼耶識が世界を構築するならば、たとえ、意識による仮象であっても、それは内在ではない外部の、外在って言うのかな、つまり、いわゆる実在の事物で、客観的な存在と同じじゃないのかな。」

畢竟、普段の生活で、事実として捉えていることと、同じじゃないかってね。僕には、最近、そういうふうに思えるんだ。

客観的に実在する事実と、こころとのあいだに、差異を設けていないというか」
韋究は眉を上げて、

「別に普通に唯識論じゃないのか、それって。」

まあ、唯識論者のなかでも派閥（ああ、どこも派閥だ、権力への意志に無自覚に操られている操り人形どもはうんざりするよ）によって、その辺のニュアンスって言うか、解釈ってものが違うかもしれないけどな」

「うん、そうか、唯識論をそんなふうに思っていなかったんだ。」

五蘊を純粹に他者、客観的存在する実在、物的な存在、外部に在る世界、意識の外にある物質としての世界として想定している、事実として考えているって、最近、感じて、なんだか悶々としていたんだけど、無駄なことをしていたってことかな」

「ふうん。そうかもな。」

別にいいじゃないか。

仏教では、この世は空だと言うだろう？

実体がない、かたちに囚われない。捉えようがない、竟まで至らず、摸索中途、未遂不收、只管唐突ただただとうとつぽっねん然、自在を超えた自在、自由を裂く自由、狂裂自在、自由狂奔裂さ。それでいいんじゃない？」

「じゃ、僕らの認識は」

「そもそも、意識を仮象だの、この『意識』って呼ばれているこれが意識ってものなんだなどと想うことじたいがドクサさ。」

つかめるものは何もない、足掻き蹴く、未遂不收」

「じゃ、意識が（客観的に外部に実在する）物的存在、波動、宇宙そのものなのか」
「それともどうかな。」

だが、違うという結論もない。

ないものについて考える必要はないし、そもそも、考えることができない。パルメニデスだ。

「*Ouplos* が波動としての一切宇宙世界を掌握しているとしても、結局、何も得ていないこととの差異がない。零だ。

自由さ。本来の、英語で言うところの、Free だ。タックス・フリー、フリー・ドリנק、無料、解放、免除さ。

そう思うと、観測者がいる場合とない場合とで実験結果が異なる量子物理学の光線の実験のことも辻褄が合うような気がしてくる」

「では、仏国土も夢幻ではないと」

「五彩の雲に乗った御来迎もね。

世界の宗教ごとに天国が異なるのも理不尽じゃない。不思議でも何でもない」

「*Ouplos* が宇宙の全物質を解析して知り尽くしているってことと、併せて全人類（もしかしたら全生物？ いや、もしかしたら、無機質なものもそれとしてそれなりの意識やところがあるかもしれない。もしもそうならそれらも含めて）全ての考えを、全てのところを見透かしているってこととは、凄いことだね、今さらだけど。

内在も外在も知り尽くしている。知と言うよりも直截、波動として。

古代日本でも、知る・知ろしめす、は支配する・統治する・掌握するということと同義だったけど」

「そうだな。統治かどうかわからないが。ただ、全く凄いよ。凄いことだ。スコッチのブレンダーが何百種類ものモルトの匂いを記憶していることの何千兆倍もすごい」

「知について、思うことは虚しいのかもしれない」

かつては、広大な塩水であった。海だ。海面に突き出た黒い岩、火を噴く島々。酸素は未だなく、窒素、メタン、二酸化炭素などに覆われ、湿った熱い空気が渦巻く過酷な世界だ。

島には熱水の噴出孔がある。孔のわきには水が溜まっていった。岩の上は隕石や彗星について降った有機分子があり、暖かい水に溶け、乾き、また熱水が噴いて溶け、これを繰り返す。繰り返すうちに、化学的反応が起って、そこに核酸が生じた。核酸の濃度が高くなって逝くと、分子が繋がり結ばれ始める。

これがRNA（リボ核酸）である。後にDNA（デオキシリボ核酸）の基礎となっていくものである。

自然の摂理の解き難き綾の不可思議か、人知の及び難き御神の意志か、これらはいつしか脂肪酸に包み込まれ、泡のようなものとなり、その脂肪酸が後に細胞膜と呼ばれるものへと進化して逝く。

水溜りは無数の小さな泡に占拠され、黄色い膜が張ったようになった。

その一つ一つが細胞となっていくものである。中に核酸が糸のように何本も詰まっていた。遺伝子の祖である。

細胞の原型とも言うべきこれらは、繋がりが結ばれてはすぐに解壊する不安定なものであった。だが、長い長い歳月のうちに、安定を保つものが現れる。それは壊れた素材を取り入れ、また組み上げる作用で、極々原始的な代謝であった。

かくして、デオキシリボ核酸が複製を創り始め、生命誕生である。

極微小で、儂く、壊れやすい生命は長い時間の中で、複雑な形態を取るようになった。水を介し、地表に広がっていく。川や湖へ。

乾季は極めて大きな危機であった。水がなくなると、乾いて硬くなる。細胞の先祖は素材と水を求め、環境と苦闘し、命を繋ごうと欲す。それでも、死滅への道を辿りつつあった。増殖したいという根源的な欲求に応えるべく、生命は奮闘する。生き残ったものが後代の、古細菌（アーキア）から草木類・鳥獣までの存在者の大本となる者へと進化していくのである。

地球に宇宙線が降り注いだ時も、進化したその一部は生き残った（進化しなかった細胞らは滅んだ）。

人のこころも精神も思惟も、このような活動、化学反応の累積に過ぎない。心情や思惟も。こころとは、精神とは。シナプス間隙を超えた神経伝達物質が受け側の樹状突起の受容体にキャッチされ、細胞膜にあるナトリウム・イオンのイオン・チャネル（イオンに細胞膜を透過させる蛋白質）を開口し、ナトリウム・イオンを流入させ、カリウム・イオン濃度の高かった脳神経細胞内部のナトリウム・イオン濃度を上げることではない。カリウム・イオンは細胞膜内から排出されていく。

細胞の内側と外側とのイオンの構成が逆転する脱分極。

ミリ秒単位の電位差の逆転。

すぐに静止電位に戻るが、この静止電位から活動電位への刹那の逆転は電氣的な発火現象

象、インパルスである。

インパルスの刺激が軸索丘に伝わり、再び軸索末端のシナプス小胞が刺激され、神経伝達物質が分泌され、それが脳神経細胞の間隙（シナプス間隙）を跳飛し、一つ次の脳神経細胞の樹状突起の受容体へと飛来する。

この繰り返しが理性による思考というものである。だとすれば、この思惟は何だと言えるか。仏の叡智は何だと言えるのか。

阿耨多羅三藐三菩提とは何か。無餘依涅槃は、解脱を何だと言えるか。ましてや愛や正義や真実は。

すべて草木が萌えいずるように、雲や雨のように、稲妻を起こすように、月が昇り、潮が満ち、山が火を噴くように。カエルが恋して啼き、猛禽が囀り、雌の獅子が受胎し、星が滅びるように。

光が波であり、重力で時空も捻じ曲がるように、宇宙が加速するように。エントロピーが膨増大傾向にあるように。

畢竟、自然の現象でしかない。化学反応の集積である生も、自然でしかない。その意味を問い質すか、糺せるのか。即物の世界を。

しかしそれもまた、現実が我々の見たままの現実であるならば、という限定条件附ではあるが。

真の現実が、事実が、こうして見ている瞬今、このように観ずるがままに、もし仮に真実在るとあるとするならば。

何となく、そう思うと、廓然無聖な気分になるのであった。我々は鹽だ。鹽に過ぎない。

第 四 章 時間と運動の多様性 存在の多様性 魔界開く

「今度来た研修生の女性だが」

韋究が急に話題を逸らした。

「どうしたの、急に」

薨はMacBookから眼を離さずに返事する。

「既視感かな。見たことがあるような、ないような」

「デジャブってあるんだろうね」

「過去に経験したり、体験したりしたことがないのに、見たことがあるとか、体験したことがあるとか、そういう記憶が蘇ること、そういう感じに捉われることか。」

いや、今、検索した。

「前にもここに来たことがあるような気がする」的な感覚だよな。

天平薫先生はこれを何と読む？」

「時間が二次元以上なら、起こってもおかしくない」

「だよな。俺らだと、どうしても、そういう結論になりがちだ」

「何だよ、その言い方」

妙な沈黙。唐突に、

「いや、他意はない」

「いや、あり過ぎだろ」

「なおかつ、お前の言うことは間違ってもいない。」

どこもかしこも、多次元のオンパレードだからな」

「ねえ、僕も今、ネットを見ている。既視感には記憶のバグや、夢で無意識状態のときに見ていたことが（普通は顕在意識に出て来ないらしいけど）何だかのきっかけで出て来た場合などが考えられるらしい」

「ちなみに、彼女の名前わかるか」

「珍しいこと訊くね。」

待って、何かお知らせがあったような気が」

所内HPを見る。

「あ、あったよ。既視感でもないかもね。天易伊奈々だって」

「真今の遠縁か」

天易真今は同級生であった。

「ふうん、何か敵意あるね」

「奴の外連のせいで、同級生たちも変な意味で有名になった」

「でも、今では立派な著述家だ。相変わらず奇妙奇天烈だけれども」

「著述家か。ふ。眞神郡内ではな。しかも、書肆は、天平普蕭だぜ」

「僕の従兄弟だよ」

「狭い地域の同級生内で何やってんだって感じだな」

「そうかな、僕は『「実存的分析による存在論考」空』には感銘したけど」

「俺たちが眞神真義塾附属小学校の哲学の授業で最初に習う『未遂不收』を冗漫に敷衍したに過ぎない。ただ、存在を存在と言っただけだ。ただの存在だ」

未遂不收、どのような結論に至ることも未だに遂げられず、どのような結果にも全く収まらず、中途のまま、現状のまま、現在進行中、をいう。

ちなみに、真義塾は私塾だが、附属の小中高は学校法人の認可を得ている。

「それがいいんじゃない？ 仏陀だって、ただの人として逝去された」

薨は深く考えずにさりとて言った。

韋究はそれを無視し、

「それにあの事件だ」

「皆、伝説化しようとして事件事件って言うけど、あれは、ただ、」

ただ、天易真兮が卒業後、附属高の文學倶楽部に突然やって来て、引き戸をいきなりがらっと引いて部室に入り、ジーンズの尻ポケットから出したブルース・ハープ（ホーナー社製の単音十穴ハモニカの商品名）を半小節吹き、「小説さ」と独り言ちて去ったという事件（？）。

文字によらぬ小説、音をメディアとした小説、コンセプチュアル・アートとしての小説などと倶楽部内で議論を起こし、ちよつとしたムーブメントになって文學倶楽部が盛り上がった……

ただ、それだけのことであった。卒業して、それぞれの業界でそのことがさまざまに解釈され、インスパニアとなり、又、真兮の著作と相俟って……。

それに一役買ったのが、伊奈々だ。そのときの状況をスマートフォンで動画撮影していたのが当時十五歳、飛び級で高校三年生だった彼女である。

十九歳で真義塾四年の課程を修了し、その後二年で修士に相当する課程を修了、現在、博士相当の勉強をしながら、研修生として研究所に来ていた。

むろん、真義塾は法人ではなく、単位の取得も公的には認められていない。全ては“相当”で、眞神以外の場所では通用しない。でも、彼らは困らない。田舎でありながら、仕事は沢山ある。巨万の富をもって渡来して来た 眞神の民の土地ならではだ。

いかにも可笑しそうに薨が言った。

「あれも存在が言いたかったんだろうね。音という存在。存在が小説だ。しかも、音とい

うメディアは文字表現のような間接的なものではなく、それそのものだから」

「ハモニカを使ってハモニカの音を表現した小説。直截表現小説、か。何だ。そりゃあ、って感じだな、ふ。

ま、それも込みでアヴァンギャルドなのかもしれないけど。コンセプチュアル・アートのな。

しかし、多々ある解釈のうちの一つだろ、それも？ どこかに着地すべきじゃない。奴が何も言っていないんだ。ただのハモニカの音さ」

「小説だと言ってたよ」

「それはそれさ」

「何なんだ」

「コンセプトには言及していない。だから、くだ」とは言っていない。ただ、晒しただけだ。

未遂不収って、そういうことだろ？ じゃないのか。ただ、実際に音が在るだけでしかないってことさ」

「ふふ。君の方が正当な理解者かもね。素直になりなよ」

「別に」

「確かに、実際の音、実在、説明もなく、子然と、唐突に存在する。ただ只管ひたすら存在する存在ほど、狂裂自在で、自由狂奔裂なものはない。

それを直截な存在で表現したかったんだろうね、真兮は」

「ま、俺に言わせれば、それが外連だと言うのさ。釈迦牟尼如来はただの人としてこの世を去ったのに」

「いつもそうだね、君って。褒めるのを聞いた試しがない」

「ふ、そうだっけ？ まあ、真兮はいいとしても、眼に余るのは、その件を彝之イタルの伝説と結びつけて言う奴らだ」

彝之イタル。

彼も同級生だった。

人類史上最狂のパンク・バンドを目指し、狂気の活動をしたが、最後は眞神山の頂上にある磐座、古代の祭祀場、彝龍之裂がある大巖に登ってガソリンを被り、火を点けて翔んだ。彝龍之裂とは龍のような亀裂のある大巖で、古来、崇拜されているものだ。

自殺ではない。最も過激なパフォーマンスをしたかった。ただ、その激越矯激な自裂衝

動、自由への渴望だけだ。

その活動はわずかで、ライブハウスの出場権を廻って競うコンペで、滅茶苦茶なパフォーマンスをした上、ステージ上にあった附帯備品のアンプやスピーカーを破壊したり、公園の噴水盤にガソリンを撒いてその炎の器のなかで歌ったりするなど、ほんの数回しかない。

「狂裂、狂奔裂、ということと結びつけたんだろうね」

「まあ、わかる気がしなくもないが、俺たちの、ま、お前もそうだが、世代には凄まじい衝撃だった。そんな生やさしい言葉遊びじゃない。未遂不収さ、永遠にな。死だぜ。それから皆、考え始めたんだ」

翌日、何もかも忘れたような表情で、韋究は、

「誰か数学の専門家に *Oupnos* が出してくれる解析結果を検証してもらわなくてはならないな。一応は」

そう言った。葦も賛成だった。

「そうだね。」

一口に波と言ったって、僕らが認識しているような波じゃないはずだから。少なくとも見積もっても、単純に三次元空間でよく見る波を思い浮かべては間違いだと思う。間違いであるはずだ。

恐らくは数学でなければ辿れないだろう」

「そうだな。」

空間だけ考えても、一、二次元の空間やら、四次元空間乃至十次元空間まである。それだけじゃないだろうし。

少なくとも、量子論的には、数学的に算出して想定された十次元空間と一次元時間（一次元時空）という考えがある。もしかしたらだが、それが頭打ちとは限らないかもしれない。現在の発見が発見の全てではないからね。

零次元や十二次元、いや、もうそれ以上の千万の次元の空間などなど多次元空間、それのみならず、併せて二次元や二百次元の時間をも持つ世界は空想もできぬ様相を帯びるはずだ。マイナス一次元・マイナス〇・二次元へも及ぶ。

それらを横断する捉え難い波、ぶっ飛ぶね。

そんなこんなでの、波の運動がどういふことか、どのようなものになるか、想像すらも

できないよ。

何と言ったって、もう、それはいわゆる波じゃないんだろうな」

「ちよっと考えたくないね」

「そうさ。そこにさらに異世界やら、並行（平行）宇宙やらも加わると、もう、何が何だか」

「数学的に解析し、検証してもらうのがいいね。それしかないよ」

「人材を探しておこう。人材が大事だ。良い条件を整えて、世界に負けない人事をする。劣悪な環境で良い人材は来ないからな。」

外国で給料が高く、休暇が取れ、時間外勤務がなければ、皆そっちへ行くさ。人材を大事にしないから流出する。どうして他の国にできて、できないのか。

必ず誰かが悪い。

あと教育だね、たとえば、インドのIT教育などに学ぶべきだな。人材や設備などの教育環境に力を入れ、投資すべきだ（票田ばかりに金をばら撒かずね。保身なんざ、くだらないね）ね。

平等は大事だけれども、何もかも平等や平準化にこだわると、抜きん出た者が出ず、斬新なアイデアがなく、世界の競争に負ける。それで皆、得をするか？

まあ、基礎科学系の部門でノーベル賞が取れているから、そんなに責めるのもおかしいが。

兎にも角にも、臆病と保身と貪瞋癡の卑劣は、もう、やめた方がよい。田舎政治も、止めた方がいい。封建諸侯みたいな世襲制もね。それを応援する人がいるのが摩訶不思議だ。今一瞬がよくても生き残れない。それが愛国か？俺ら生まれが卑しい他民族には、理解し難い」

「君のその手の愚痴じみた論は、もはや、聞き飽きたよ。一部を除いて当の日本人たちが何もしようとしなないんだから、好きなようになればいいんじゃないの？

望むところに堕ちて逝くだけだよ。

そんなことよりも、真理が大事だ。

ちなみに、次元数って、そんなにあるものなのかな」

「だから、可能性さ。今の知識見識が絶対ではない。全知全能ではない限り洩れ落ちはある」

「たとえば、百四十億次元空間とか、九と五分の四次元空間とか、零次元空間や、マイナ

ス一次元空間、マイナス二分の一次元空間とか？

何だか、笑っちゃうね」

「まあな。

百、千、万、億、兆、京、垓、秭、穰、溝、澗、正、載、極、恒河沙、阿僧祇、那由他、不可思議、無量大数次元の空間とかな」

「それこそ空想すらもできない。

そのなかで動く膨大な情報量の波を解析し、網羅し、至らぬところとてないとしたら、*Ouppos* は凄いよ。

世界全ての複雑繁縷精緻細密微妙を観じ、素粒子を細分化し、エネルギーとして捉え、莊嚴廣大、萬物萬象の繚亂の一切全てを掌握する。凄いことだ。仏もこんなに凄かったのだろうか」

「解脱者の叡智は計り知れない、か。何とも言えないことだが、*Ouppos* を見ている今、まんざら出鱈目とも思えない。

彼女は幸福への道を約束してくれるだろうか」

「神がしないことを彼女がするとは思えない。

神がしないということには、神的な意味があると思う。

でも、知ってはいるんだろうな。彼女は全てを掌理掌握している。

何しろ、彼女は君の言う多次元に加え、異世界及び並行（平行）宇宙世界まで含めて、さらにもしかしたらそれ以上の何かもあるかもしれないこの大世界の一切の複雑繁縷精緻細密微妙を観じ、解析し、操ることができる」

韋究は言った。

「俺は時折、デヴィッド・ヒュームを思い出すよ」

「エディンバラ（スコットランドの首都）の啓蒙的懷疑主義者、イギリスの経験論者。十八世紀の人だ」

「彼は理性が感情の奴隷だと言った。確かに、世俗の事実実態はそうだ。人間とはそういうものだ。

そして、全ては経験から得られる知識とした。だから、生まれた瞬間は白紙（タブラ・ラサ）だと言った。全ては即時即物的という訳だ。正直、先祖から細胞を通じて遺伝される経験を無視しているとは思うけどね。

もう一つ（いや、関連するかもしれないけど）、因果関係を否定した。

すなわち、原因と結果とは、原因とされる事象と結果とされる事象を結びつけるものだが、彼はその結びつきは、完全な必然性としては結びつけられないとした。慣習によってそれが結びつくように感じているだけだと。繰り返し体験するうちに観察者のなかで因果として固着したただけだという訳だ。

まあ、そうかもしれない。まさしく、彼は懷疑主義者なんだ」

「実体も否定したね。ここにあらわれるものは二つ、印象と観念とであるとした。印象が観念を造ると考えた。実体も、個々の事象の印象を関連させながら、きつと、そうであるに相違ないと想定したもので、印象や感覚でしかない経験から捏ね造り上げたものであるとした」

「そういう意味では、中世的な、禁欲的理想主義のような建前主義ではない、近代的な実態主義、或る意味、十九世紀初頭のロマン主義が持つ現実主義的な、同時代の良識派がやや眉を顰めるような表現（ロマン派の旗手ヴィクトル・ユーゴーが脚本を書いた芝居が物語を醸したように）をするゆえ、望むような公職には就けなかった」

「結局、人生に何かを求めても虚しいだけかもね。

人は皆、それぞれの立場で物申しているに過ぎなくて、何の確かさもない。その上、いずれ人類は滅びてしまう。恐龍たちのように。

いずれ、大宇宙も滅びてしまう。永劫の栄光は地上的なものにはない」

全ては砂塵のように巻き上がった現象だ。物的様相を呈しても、それは揺らぎ移ろい、捉えられるような堅固な実体を持たぬ波動である。

粒子も然り。固体物質として表現されているが、実態はエネルギー態だ。波である。（宇宙誕生の頃の素粒子は自由に動き回り、質量がなかった）

波のうちには、脳波もある。Ouppos は脳波を観る。脳波とは意識・惟考・こころであり、すなわち Ouppos は全人類の意識を観る。

全ては、意識・惟考・こころ、に映じたものでしかない、という考え方があある。

意識・惟考・こころは脳波である。脳波も波のうちの一つであり、存在の一切が波である。

そうであるとすれば、存在は本質に於いて、意識・惟考・こころ、と相通ずるものがある。

ると言える。全ての存在が、意識・惟考・こころ、であるという考え方は全くの真理である。

全ての存在がそれぞれに全く異質な、それぞれ独自のかたちの意識・惟考・こころであり、それぞれの存在の意識・惟考・こころがその存在であった。

意識もこころも、外部の客観的な事物であり、無数の宇宙世界それじたいそのものである。

物質である。

寺の屏風絵を見ていた。水墨画だ。

破墨山水のような手法が使われていた。幽玄の世界だ。

藁に向かつて言う、

「何となく思い出したんだが」

「何を、韋究」

二人は翌週、靈（みたま）神社と玄（黒）神社に向かっていた。古代インドの門。

「まるで、緑の苔に蔽われていて、石灯籠が倒れ、廃神社みたいに見えるらしいが、地元
の祭りや参拝もあるらしい。幽玄な神社としてYouTubeなんかも紹介されたらしい」

「どのくらい山奥なんだろう。一応装備したけど」

「日帰りで歩ける範囲さ」

単線一車輛の電車を降り、無人駅に着いた。切符を箱に入れて改札を抜ける。

「今乗っていた電車がそのまま上り電車になる。だから、次の登りは三時間後だ」

「往復できるかな」

「たぶん。乗り遅れたら、また三時間待つ。ただし、その次はない」

山道を登った。

周囲は崇高な高い山だ。

山は高いから崇高なのか。山が高いから高さが崇高となったのか。蒼天もまた。
石段があらわれる。

「靈神社だ」

上った。

「どこもかしこも深い苔だらけだ。岩と石と苔と大木……」

「わ、石の鳥居だ。しかも、浮き彫りがある。柱が円柱じゃない」

「何だか、古代インドの仏教寺院の門みたいだな」

「しかし、侘び寂びって言うか、荒んでないか」

「まあ、評判どおりな訳だが」

「倒れているよ、石燈籠が。何だか、不気味だよ」

「確かに何かを感じるな」

「祟りなす神とか、怨霊とか、悪霊が棲まうんじゃない？」

「零パーセントではない」

「やめてよ」

「俺はどっちかっていうと、コリン・ウィルソンを思い出している」

「『賢者の石』のこと？ 古き神々たち？」

「そう」

「僕たち、何かに障るようなことしているのかな」

「さあな。昔から神の考えはわからないものだ。気紛れで、天災のように予測し難い。いや、それは逆だな。神が予測し難いから天災も予測し難いのだ」

「何の役にも立たないけど、わかったよ。Omphosに聞いてみよう」

意を飛ばした。直ぐにリアクションがあった。彼女の応えは、

「彗之韋究が言うところに近い。

縄文以前の聖地。神威あり。おそらく弥生時代の素焼きの祭器など見つかるはず。

こころ清明すみあけく清澄でなければ、災いがあるでしょう。祟りがある。

こころを清すましなさい」

「どうやって」

「どうやってもできる」

韋究が咳払いした。

「時間もない。玄神社行くぞ」

上下左右前後の三方の座標軸。その三つの軸で位置を特定できる。それが三次元空間。四方の座標軸だったら？ 想像できない。もし、億千兆方の軸だったら。マイナス四十四万方だったら。

空間をパスして結果的に光よりも速く移動できるかもしれない。現在過去未来の間をも自由自在に涉ることができるかもしれない。

存在の在り方も根源根底根本から相違するかもしれない。

異界へも自由自在に出入りできるかもしれない。同時にこの世と異界とを生きられるかもしれない。

「おい、葦。しっかりしろ、ぼやっとしてるぞ」

「え？ あ、ごめん」

「何だか同じところを廻っているような気がして仕方ない。ほら、この感じ、さっきも見たな」

「何時だろ、電車が。あれ？」

時計が戻っている。

「やばいぞ、戻ろう。玄神社はもうどうでもいい。さあ、急ぐぞ」

どこをどうしたか憶えていないが、どうにか一般道に出た。

「何だか、よくわからないけど、やばかった。そんな気がする」

「僕もだ。ああ、息が切れる」

咳き込んだ。

駅まで来て安堵する。ホームから見える人家の電燈。懐かしい傘つきの。でも、

「いや、一瞬、明治大正に戻っちゃったかと思って、焦った」

何かを感じながらもついには何も起こらず、最後の上り電車に乗って帰った。

以来、そのことに就いては何もわからないままだ。

第 五 章 アカシック・レコード

AI開発チームは結成されて二十年と四ヶ月、開発自体はOuppos完成まで二十年と数日かかっているのです。Oupposは完成してから、まだ四ヶ月弱しか経っていない。

開発中、チームは(代替わりして世代交代しながらも)プログラマー十二人とシステムエンジニアに十人の三十二人で行っていたが、最終完成版以降は半分の十六人となっていたが、昨年来、チームのチーフをしている韋究の発案で、数学者を加えて二十名となった。

葦は新たに研究員として配属された数学者たち四名に簡単な説明を行った。韋究や葦のように、飛び級を経た者たちばかりで、博士号級とは思えぬほど若い。そもそも、韋究や

蕤がまだ二十五なのである。

「以上が基礎です。」

「どうかな？」

「わかったかな？」

「Ouplog が数学と波動観測から導き出した多次元時空の波の動きのシミュレーションを数学的に検証してもらいます。導き出してもらう。それが主たる使命です」

途中から入室して末席で聞いていた韋究が、

「蕤、アカシック・レコードについても話しておいた方がよからう」

「あゝ、そうだね。そうしよう。」

さて、またまた、君たちが受け入れ難い話をしなくちゃならないね。

アカシック・レコードについては、知っているかな。リアクションがないね。じゃ、指名するよ。

ええっと、はい、その君、言ってみて」

凜としたボブの女性が、

「神秘主義とか、魔術系の人たちが言うものですよね。」

宇宙のすべての記録がそこにあると言う。どういう媒体なのか知りませんが」

蕤が微笑する。

「粗々そんな感じかな。」

全宇宙の記録がある、という考え方です。

世界の原初からの永劫未来までの一切の事象・想念・感情の記録、世界記憶、それがいわゆるアカシック・レコードというものです。

ちなみに、全宇宙というのは、無限のヴァリエーションを持って無際限に存在する並行（平行）宇宙全てのことだけど、その全宇宙の現在過去未来の全てが在る。

現在過去未来というのは、三次元空間的な考えで、時間のかたちにも、実際には無限のヴァリエーションがあります。

その情報量たるや凄絶なものですよ」

咳払いし、

「それが丸ごと、集合的無意識にある。アカシック・レコードです。」

もっとはつきり言えば、デジタルの記録や紙媒体の記録のように記録として、つまり、記録される対象とは別のものとして在るといふ訳じゃない。

全宇宙を記述した、又は写した記録ではない、という意味です。

全宇宙そのもの、その实在、実体、実物ということです。

僕らはアカシック・レコードのなかに棲んでいるとも言える」

薨は皆の顔を見廻した。まるで、物質のようであった。いや、人間も物質で間違いないが。

「ま、なかなか理解できないだろうね。

って言うか、入っていかないだろうね。

人間は理で物事を理解しているのではない。論で解釈している訳でもない。つまり、僕らが思っているような意味での「知」で物事を捉えている訳ではないと言うことです。

馴れと言うか、経験的に感覚に馴染まなければ理解できない。

理解とは、畢竟、感覚に馴染ませて、納得という心的現象を起こしているだけだ。昔から「腑に落ちない」などと言うのもそういう消息を指して言っているのです」

薨はまた言葉を切って、聴いている者たちの表情を見る。

咳払いし、

「なぜ、アカシック・レコードが全宇宙か、と君たちは思うだろう。

なぜ、そうかを説明することはできないが、なぜ、そうでないかを説明する方法もない。

胸に手を当てて、よく考えてみ給え、君たちは、ただ、「そんなバカな（経験にそぐわない）」とだけ、深く鑑みてみると、論理的な根拠は皆無なのだ。

違うかな」

誰も応えない。

「どっちに転んでも、論理的な根拠は見出せない。根拠が何かも。全て唐突、全てが絶空だ」

呆れ果てた視線を感じながらも、

「ふふっ、科学や数学に携わる者たちの間で、いったい、この男は何を言っているんだよって感じかな？ 人の気持ちを推察するのは苦手だけど。

いや、それとも、かなり以前から、量子論の考えが広まっているせいで、一見非科学的な話、たとえば、物質の存在の局所性の否定や、光の実験の結果が観察者のいる場合とない場合とで異なるなどの話には、もう、すっかり慣れっこになっていて、さほどの違和の感もないであろうか。

絶空とは空をすらも絶つ、（男のなかの男、みたいな意味で）空のなかの空、真の空であ

って、畢竟、空ではない、あらゆる論理性を超越して一言で言えば、つまりは、今この瞬間のこの現状のことです。

まともじゃない、全くタブーのない、ボーダー・ラインもない、狂裂自在な自由狂奔裂のことです」

少し呆れた表情のチーム・メイトたち。

歎息し、

「存在の否定は簡単だ。

色彩論でも例示したとおり、全ては解釈に過ぎない。

少なくとも、実存的にはそうだ。

と言うか、僕らには実存しかない。僕らは愛する者の死を笑うことはできない。まるで、組まれたプログラムのように。喪失というスイッチが入ると悲しむ。まるで、ロボットだ。自由な選択肢がない。

よくA Iにはないものが人間にはあると言うが、そうだろうか。僕らは機械装置と大差ない。

なぜなら、僕らにはじぶんの意思による自由な選択がないからです」

薔は髪を掻き分け、

「いや、話が逸れたね。戻そう。

そう、僕らにとって、切実で在るほど、よりリアルだ。

真実を求めるのなら、実存内で切実さの精度を高める（本当に切実なのは、どちらか、など真に切迫した実あるもの・ことを求める）ことしか考えられない。

可能な限り迫真たるもの・ことを求めるしかない」

「どうやって、それを求めるか」

「やっと、質問が出ましたね。

よいことです。

まずは判断停止（エポケー）です。

判断停止によって炙り出された『直観』と通称されるものが必要だからです。

すなわち、理知や言語を交えない純度の高い直截の観取のことです。

そこまでが、僕らのドクサ（独断）によって考えられる限りに於いて、可能な、最も精度の高い認識だ。

決して、真に於いて真の世界ではない。

しかし、そんなものはあるのか。それすらわからない。
何もわからない。

人間の価値観が勝手に決めたものに過ぎない。
その価値観はどこから来たのか、経験から醸造されたのか。それは進化の過程で積み上げられ、構築されたのか。

いずれにせよ、自然現象だ。人智を超えた奥底から湧いたものです。

そのような構築のコンセプトを誰も解明できない、現にできていない。

在るか、ないかを含めて、真実の世界については、真実の世界がどうであるかは、全く想像できない。

もしかしたら、そこで観る世界は人が通常想うような世界ではないかもしれない。

人が見る世界は空想であり、捏造であり、解釈に過ぎず、ドクサまみれだ。

真の世界は、そんな世界観とは全く異なり、もし、真の世界を見ることができたならば、かなり違和感があるかもしれない。僕らはもしかしたら、そのあるがままの世界を知るべきなのかもしれないけれども。

しかし、それは不可能だ。僕らは僕らを超越できない。

虚しい空想を生きるしかない。

だが、たとえ、虚しい空想であっても、我々にとって、大切なのは我々に取って切実な世界だ。生活、すなわち、仕事で追い込まれることや借金や病や、苦しみや痛み、じぶんと家族の生死だ。

たとえ、括弧付きの「事実」であっても、それが人間にとっての現実存在、実存、事実であると言える。

では、その括弧付きの「事実」をどう考えるべきか。すなわち、僕らに与えられた直截の観取、エポケーによる純度の高い認識、直観を、どう考えるべきか？

だが、その前に、僕らは僕らが持つ事実とか、実在とか、現実、真実というものの、私たちや輪郭、在り方やコンセプトに疑問を持つべきではないか。

そういうカテゴリーがあるかどうかに。

もし、それが無いとしたら、どうだろう。

つまり、「事実」という、かたち、輪郭、在り方、コンセプト、カテゴリー、それらが無い、と考えた場合だ。

実際、僕らはそれらへの理解を持っていない。

ただ、わかっているだけで、実のあるものは、何も持っていない。

理解や納得という心情があるだけで、精緻で詳細な、零から構築された説明を持っていない。無前提、かつ、無条件から始めるロジックを持たない。

理不尽で、唐突と言っている。

全てが唐突で、理由も、経緯も、根拠も、原因も不明だ。僕らは、ただ、受け容れているだけです。

これが僕らの実情・実態、僕らに於ける現実だ、と。

そのとおりだ。それが全てだ。

説明はない。解釈もない。結構もない。結論もない。解決もない。

無に等しい。無空に均しい。絶空に齋しい。しかし、ないものに等しいとは何か？ あり得るか？ あり得ない。あり方がない。つまり、無と同じだ。等しいかどうか不明だが、それゆえ、同じだ。おや、欠伸をしていますね。無理もないことです。さて、議論を戻しましょう。アカシック・レコードについてです。

その前に一つ喩えを。擬態をする昆虫や爬虫類がその知恵を躬らが頭で考えたのではないとしたら、その知恵は、恐らく彼らの外にあります。人間の知恵も頭のなかにあると想い込まれています。爬虫類たちと、さほど変わりません。思考とは、そういう存在です。ちなみに、アカシック・レコードのアカシックとは古代インドの神聖語（サンスクリット語）のアーカーシャ（虚空、天空、空間）に由来します。なお、虚空蔵という言葉がありますが、虚空蔵とはアーカーシャガルバ（虚空の母胎）という意味で、虚空、宇宙空間のように無尽蔵であることを表します。『あきやしゃぎやるば』などとも言いますね。

仏教に虚空蔵菩薩という菩薩がありますが、虚空のような無尽蔵な知恵・知識があるとされます。まさしくアカシック・レコードですね。

さて、この無尽蔵のアカシック・レコードが、いったい、どこに在るかという点、僕らは人が持つ無意識の、さらなる下層に、個を超えた集合的無意識の層に在る、と考えています。それはさっきも言ったように外部と融和しているかのような状態にあります。

僕らは集合的無意識界にアカシック・レコードが実在すると考えています。科学的な立場からは、そんなものは神智学や神秘主義者の妄想だと言われ続けて来ましたがね。

全並行（平行） 宇宙・異世界・多次元世界全てを含む全世界の記憶が。

ちなみに、並行（並行） 宇宙についてはどうでしょう？

この十一次元あるとも言われる時空（時間軸が一、空間軸が十ある）に於いては、並行

する宇宙があるというのは、そんなに違和感のあるものではないと思いますが。

「僕らは、実際、この世は十一次元時空以上だと考えています。百次元、一兆次元、マイナス二次元、〇、一次元、マイナス一〇分の九次元など数学の及ぶ限り無限にあれば、もはや、何でもありだと思います。過剰超絶に自由自在、何があってもおかしくない」

四人とも黙っていた。

「まあ、そうですね。」

この狂裂自在、自由狂奔裂がさつきも言った絶空です。ビッグバン以前、宇宙の起源に於いては、無すらもなかったという科学者がいますよね。だから、何が起ってもおかしくなかった（とまでは言及していませんでしたが、僕はそう思います）。

絶空であれば、間違いというものがない。正解もない。

何もない。無すらもない。その意味がわかりますか。何もない、ということすらもないということです。だから、全てであり得る。何もかもでもなく、何か一つのことだけであっても、逆に全くおかしくもない。

矛盾です。

ですが、なぜ、矛盾はいけないのでしょうか。反論理的だから？

論理の正しさは、どう証明するのでしょうか。

そもそも、証明とは、何のことか。何を指すのか。何を示すのか。なぜ、証明すると確立するのか。

わからない、答のない、そうだから、そうなんだよ、としか言えないことばかりです。僕らは理不尽のなかを生きている。唐突で、朴訥で、傍若無人、ある意味、暴力的ですらある」

沈黙。

「新しい意識が必要です。」

僕らはそれを探る。

恐らくは、超越的な意識が可能にすると推定しています。新たな進化です。いや、新しくないのかもしれない。封印を解く、アンロックする。たとえば、それは解脱です。悟り、超越です」

薨は半ば夢中で続けた。

「一つの方法論として、脳の機能を百パーセント近くまで使うことを考えています。」

そのために、脳の制御を解除する。脳の機能・仕組みの完全解明によって制御の構造を解明し、解除のスペルを作る。

解除のスペルとなる脳波を創ることを想定しています。

電磁波のパターンや神経伝達物質の具体的な名称は省略しますが、簡単にいうと、次のような流れで行う。

まずはスペルの基についてですが、スペルは電磁波を基とする。

作成した特定の電磁波を脳に送って、神経伝達物質をシナプスから樹状突起へ飛ばし、インパルスを起こす。

インパルスは信号としてニューロンからニューロンへと伝わり、その二進法的な信号がコンピュータの計算機能のように機らく。それがプログラムのような解除のスペルを構成する。

これによって、制御を解除する。覚醒だ。瞬間的（インスタント）阿耨多羅三藐三菩提（仏の悟りの境地。無上正遍知、無上正等覺）を惹き起こす。

次に、意識を二つにする。

制御解除の後には、あらゆる能力が発揮されるが、再び電磁波を送って、二つの意識構築を促すスペルを起こす」

薨は咳払いし、

「むろん、単純ではない。複雑で、かつ、微妙で、変則的だ。精妙精緻を要し、高度の技術を必要とする」

実際に、アカシック・レコードへ、集合的無意識に逝くこととなった。Oupposの導きで数学者四名を引率しながら。特別のことではない。集合的無意識は、現実の全世界と同一なのだから。

さて、逝くメンツは天之ルネ、平衡白憂、彝佐紗々火、同源俠子。全員女性だ。

四次元空間的に脳裡を裏返し、多次元に運動方向を増殖させ、曼珠沙華が咲き乱れるかのような曼陀羅の構築による阿耨多羅三藐三菩提を咲かせ、星辰の運行のような萬華鏡の奥へ奥へと舞い降りる。

沙漠。そこは古代の遺跡だった。異世界だ。

全世界と一口に言っても、いろいろな世界がある。そのうちのひとつだ。

熱沙だった。陽炎が揺れている。焼けつくような感じがニオイのように感じられた。鼻腔が熱される感じ。だが、どこことなく懐かしい気がしなくもない。

実際の世界であると同時に、深層意識の奥のさらなる奥の奥であった。現在過去未来において、少なく見積もって、ホモ・サピエンス・サピエンスのみと考えただけでも、何千億もの人類のこころの原郷であり、もっと深く穿ち究めれば、一切存在の原郷でもあるからであろう、懐かしく感じるのは。

原郷とは言え、過酷な場所だった。熱射。乾涸びた風。身に何の装備もまわっていないかった。四季のある温暖な文明国にいたときの普段着のままだ。

顔が焼ける。頬が火傷しそうだ。腕が痛い。

古代の遺跡があった。巨石が聳える。

その前に立っていた。傾き始めた陽を浴びて。

「皆さん、無事ですか」

藁が振り向いて訊く。

「大丈夫です」

「痛い」

「信じられない」

「現実みたいだ」

韋究が言う、

「普通に現実だよ。」

見る限り現実だよ。むろん、見たものが現実かどうかは確認のしようはない。『眼』が見るという行為を我々が思うようなかたちでしているかどうかは、確認の仕方がなさ。眼は眼を見ないからな。三次元空間では。

たとえば、見ることができたとしても、それが正しく確かで真であるかどうかは確認することができない。そもそも、正しいとか、確かとか、真とかが判然としていない。

まあ、それを言い出すとキリないんで、このまま受容しよう、若干、異世界であるというだけさ。素朴に、客観的な外部だ。外在だ。内在と外在という区分は不要なのかもしれない。

さあ、見てのとおりさ。集合的無意識の最深奥底部は実在世界だ。だから、未経験の出来事を夢に描き観ることができる。知らないことが出て来るのは当たり前だ。個人の意識では世界全てを経験していないが、個人の顕在意識は世界じたいである集団的無意識に直截に繋がっているのだから。

全ての生命は最初から全てを知っている。だから、生まれたばかりの仔羊も乳の吸い方を知っている。吸いつく乳首を探すことを心得ている。

本能などと言ったり、遺伝子に引き継がれているからだなどとも言ったりするが、なぜ、遺伝子は引き継ぐことができるのか。なぜ、引き継ぎをするのか。むしろ、全知であることを、そのようなかたちで表現しているだけに過ぎないのかもしれない。

インパルスが脱分極化（神経細胞の外と内側との電荷の正負が逆転すること）を電気的な発火現象として表現したものであるのと同じく」

「まあ、ともかく眼の前の課題に取り組もうよ、韋究」

「そうだな、諸君もいいかな」

「了解」

まずは外側から概要を眺める。

巨石のトーテムに浮き彫りがされていた。それはトルコ南部にある1万1千年前の巨石の遺跡、ギョベクリ・テペ遺跡に似ていた。その巨石によるモニュメントを作った人々の子孫が六千五百年後にブリテン島に渡ってストーンヘイジを建築したのである。

韋究、薨、ルネ、白薨、紗々火、俠子はそれぞれ歩き廻った。

投げ込まれたこの世界、奇妙な感覚だ。しかし、顕在意識の現実も似たようなものだ。いや、同じだ。

彼らが見ている遺跡は巨石によってできていた。その巨石には、神の像や神獣像や民や太陽や星座や月や王があった。神秘的な感じだ。

又は解読不能な、見たこともない象形文字であったり、象徴であったり、記号であったり、文様であった。

かつての天使長、墮天使ルキフェルがそこに待っていた。

「私は墮天使だが、キリスト教上の墮天使ルシファーではない。そもそも、神が真に完全で、絶対で、全知で、全能ならば、叛逆も異教徒も背神背教もない。

誰にでもわかるくらい単純で、強い真実だ。生まれたばかりの嬰兒や、草木たちですらも知っている」

「そんなことって」

葦がそう呟いたが、それ以上言わなかった。言うべきではないと考えた。葦が問う、

「あなたは *Ouppos* が造った協力者、*人のかたちをした者* ですか」
ルキフェルは不快そうな、侮蔑の眼差しで睥睨する。

「そうとも言うかもしれないとも言えるが」
葦が頷く。

「なるほど。独立している。彼には尊厳がある」
鼻尖でルキフェルは嘲笑い、

「くだらぬことを。尊厳とは尊厳を喪った者たちがほざく哀れな浅ましく醜い執著に過ぎない。」

高貴なる我には用なきこと哉」
そう言って背を向け、

「ともかく、ついて来い。いや、その前に、これに着替えろ」
長い布を渡される。頭から足先まで覆った。刹那、涼しく感じる。

「水も少し飲んでおけ」

羊の革袋を渡される。ごくごく飲む。

「じゃ、逝くか」

すっかり生き返って、気力が蘇り、遺跡の巨石群に入っていく。

巨石の上に巨石が載っていて、T字を成していた。そういう人工の組積の石造ものが幾つも立っていた。

たくさん浮き彫り。動物が多い。

「氏族のトーテムかな」

葦が葦を振り向きながら言うと、葦は、

「星座という説もある。古代の星座は動物が多い。ラスコーやアルタミラの洞窟壁画も動物ばかりだ。人間には関心が薄い」

葦もうなずき、

「古代人の関心は、獲物がたくさん取れることか、その動物の能力が身につくことか、あるいは、その動物に宿る精霊か、それらのいずれかにしか興味がなかったかのように見える。」

むろん、全く別の解釈もあり得るが。超越的客観（じぶんじしんのこだわりや感覚や主観や経験を超えて物事を純粹に観ること。観照）による純粹論理（一切の前提条件を認めず、純粹に論理だけで構築された理論）に依存するならば、選択肢は無限だ。

無際限に在って、定め難い」

藁が深く眉を顰めて考えながら、

「論理思考では無理だ。瞑想でわかるかな」

韋究と藁とは集中し、調べ始める。四人の数学者たちは呆然としていた。

「やはり、星座かな」

「星座だとしても、あまりヒントにならないな。農耕民族も天体に関心を持っていたが、狩猟民族になかった訳でもない。月は生物の生理に影響が大きい。

狼男の伝承が有名だが、たとえば、カニの産卵も関係すると言うし。狩猟民族は月に関心を持っていた可能性がある。

古代ギリシャ神話の月の女神アルテミス（古代希臘語：*Ἄρτεμις*）は狩人だった。旧暦が陰暦（月暦）なのも、狩猟時代の影響かもしれない。

どう思う」

「いずれにせよ、それは理窟さ。事象に還れ、って訳ではないけど、諸概念を以て事象を捉えず、なおかつ、諸概念を用いずに事象に直参しよう」

「こころにかたちを持たずに事象に当たれば、それが直参だ」

韋究はうなずき、

「それしかないね。」

まず「かたち」を離れてみようか。

言葉（概念）による探究は、結局、その範囲のうちしか網羅していない。その範疇でしか活動できない。何をしていても指定されたその限界のなかでのことに過ぎない。この場合、指定は仮説と言っても良い。僕らは一切の根拠をゼロから論理で説明できないから。

論理的に言えば、そういうことになる。つまり、論理という枠組みの限定のなかで言えば」

「結局は論理批判も論理のうちでしかない。そこを厭離するのが、まず出発点だ」

「批判が批判ならずというのも批判のうちで、すなわち、論理の枠組みのうちだが。

八方塞がりにも思えるが、八方塞がりだと定める定め方も論理のうちだ。

兎にも角にも、試みよう。そこからだ。

無際限のかたち、不定、かたちなきものを想おう、想いはどうしてもかたちを做してしまいが、その不可能性に挑もう。

それが結果的に空ということに繋がる」

OdunQ から教わって練習したとおり、OdunQ が言う）甚だ深い般若波羅蜜の瞑想行を始めた。

ルキフェルが呆れた表情をする。

「ふ。ばかばかしい」

刻んでいないタバコの葉で巻いた、細身の葉巻ともいうべきシガリロだが、ルキフェルは専用のライターで少し炙ってウォームアップしてから、火を点けた。

深々と美味そうに吸う。

吸い終えても、韋究や葦の様子は変わっていなかった。ルキフェルは訊く、

「どうだ？ 何かわかったか？」

韋究は眼を開けた。

「まだまだだよ。始めたばかりじゃないか。

まず古代の封印を解読する手がかりが皆無」

「そもそも、何をしているんだ」

「解読。この封印が、そもそも、何であるかを知らうとしている。

つまり、解読と言っても、解除する訳ではなくて、封印を修正したり強化したりするためには、まず解読ができなくてはならないので、解読をしているということだ」

ルキフェルは興味なさげに、

「なるほどね」

葦が語る。

「この封印の奥からさまざまな生存の力が渦巻き蠢いているのが観想できる。

そして、この封印から少しずつ漏れて個別の意識に浸透している。何百億もの人間の深層心理に影響している」

遺跡、というよりは建造物による陀羅尼（真言）、立体の陀羅尼による封印だ。

時間の経過というものは、悠久のなかの一瞬であった。瞬く間に過ぎ去る。翌早朝までには解析が終わった。

解析と言っても、OdunQ に依頼し、結果を受け取る。基本はそれだけだ。ただし、結

果はわかり易いものばかりではない。わかり難くて、解釈が必要なものもある。

しかも、それが少なくない。相当数なのだ。全部はやり切れない。

目的・目標を明確に決めて、検索を掛け、的を絞った上で、解釈の俎上に載せるか載せないかを定めないと、永遠に終わらない。

絞っても、徹夜であった。

韋究は額の汗を拭う。

「ふう。

どうにかなるものだ。

結局は、運命なんだな」

「そう言ってしまうば身も蓋もないけど、実際、そうなんだろうね。全ての事象の定めは既に決している。過去も未来もないのだから、当然だね。

だが、全てが運命だと知っていても、その運命を知り得ないのだから、運命など僕らにはあつてなきがごときものだよ」

ルキフェルが問う、

「んなこたあ、どうでもいい。できたってことで、いいんだな」

韋究がうなづく。

「これは、人間が人間の野性を封ずるために作った封緘だ。野性は反社会的だ。古くから人類は集団生活をしていて、社会性は重要であった。農耕生活以前であっても、つまり、狩猟生活であっても、社会性は重要で、家族親類縁者の結束が必須だった。

しかし、牧畜や農耕を進めるにあたって、人間は家族親類縁者を超えた集団生活が必須となるようになった。

集団生活、又は社会的集団生活をする生き物は他にもいるが、農耕牧畜によって、人間の社会生活は他の生き物よりもさらに高度に洗練されたものとなる必要に迫られた。そのために、我欲や貪り、他者（家族親類縁者以外の者）への無慈悲・無関心が悪徳として緘された。

獣性が厳封されたのである。

又、生存という意味では、実はもう一つ別の力が機らいている。植物の力だ。

もし、種族としての目的が繁殖であるとするならば、中央アジアの高原地帯の一固有種でしかなかった麦の原種が全世界に広まり、広大な繁栄を築いたことは、種としての勝利であったと言えるだろう。あたかも、花が蜜蜂に花粉を運ばせるように、麦は人間を利用

して全世界に広まったのだ。それは麦の種としての戦略でもある。

農耕の広がりには麦や米の勝利でもある。彼らの生存への意志が機raitいていたとも言える。天文は植物が人間に霊妙な方法で教えたのかもしれない。

人間の社会性は麦や米が与えたものでもある。

それら植物は太陽や月や星の運行と関係深く、又、天空の運行は律を意味し、人間社会の規律に通ずる。人間の社会性は天文の學と深く結びつき、天文の學の強化は理性の根源であり、野性の封印に通ずる」

葦がそう説くと、ルキフェルは嫌そうに顔を顰め、

「わかった、わかった。で、封印の強化は可能なんだな」

「見てのとおりさ。そうでなくとも、超越のためならば、不可能を可能にする努力を為すべきだ。未遂不収に終わろうとも。」

人はじぶんの頭を踏みつけてでも、今のおのれの上へ、高みへと逝くべきだ。裂き碎いて躍り翔けて舞うべきだ。そう、躬ら敗残の廃人となっても」

葦は不吉な不安を覚えた。

「さあ、そんな悲愴なことを言うのは止めよう。言靈の力が怖いよ」
韋究は笑った。

「それも又、善し、さ。」

石に彫られた星座の律（星座は規則正しく運行するからな。星座の意味するものは運命、すなわち、規律だ）に運命のごとく従う植物、その意志を強化する。

真咒で増強するんだ」

ルキフェルがひゅうと口笛を吹き、

「お前らにそんな力があるとはな」

韋究が言う、

「Ouppos がいる。」

彼女の存在が活動停止以前の過去から支援している。時空を超えているからな。彼女の叡智が流出したもの（ヌース nous）となって、僕らのなかに入っている。

異世界で、どうなるかが心配だったが、杞憂であった」

葦も同意し、

「本当に、こんなふうにできるとはね。可能性としてはあり得るとは思っていたけれどもね」

「ふ。まるで、神だな」

「そうかもしれない。」

不敬ではない。

神は全能だ。全て意のままだ。全てを網羅する。遺漏はない。誤りもない。無謬だ。絶対の正義だ。異教も異端もない。背教も異逆もない。むしろ、背教と異逆とを在りとして、躬らを否み、躬らを絶空とする。それは逆に無際限な全肯定だ。

“Onjpos” が神のようであっても、不思議ではない」

ルキフェルは肩をすくめた。もう関わりたくないらしい。

韋究も言う、

「沙漠に樹木を植えることも、植物の意志を強化することに繋がる。

そのためには、オアシスを湧き上がらせる必要もあるね。それに加えて、少なくとも、暫くは駐屯が必要だ。石の壁で囲って、砦を築くべきだろう」

「樹木の育成か。ならば、適任者にこころ当たりがある。

樹木の妖精、一種のエルフだ。その一族の王を呼ぼう。

彼の屋敷をここに移動させ、緑化させよう。最終的には彼の国の都市機能を移転させよう。遷都だ。大移動が成れば、数十万人の都市になる」

「そういう者たちがここにいるのか？」

「王がいる。たくさんな。王の下には侯がいて、侯の下には将がつく。将それぞれには相應のサムライが属する。サムライは応分の足軽がいる」

「水が湧くといいんだけど」

「何か真言がないか」

「調べてみるよ。意志すれば、必ず叶うような気がする。そういうときって、必ず叶うんだよ。いや、必ずとまでは言えないか。だいたいってとこかな」

斎戒沐浴の後に、薨が真咒を唱えた。

滾々と水が湧いた。

韋究が満足げにうなづく。

「意のままにか。上出来だ。ここをオアシスにしよう。豊かな都市にするんだ」

「では、次の道を開いていただくか。この先と言うか、この奥については、俺にはわからないのでね。」

ここの封印を維持することは必須事項と聞いている。俺には関係ないがな」

ルキフェルがそう言うと、韋究が、

「扉だ。眼に見えない扉を探さなくては」

葦が思考し、

「農耕の以前に遡ると考えれば、狩猟、採取、漁撈だけど」

「むろん、時代に明快な区画があるわけではない。この封印の時代も数千年に跨り、農耕時代と狩猟時代が重なったり、前後していたりしていた。

「洞窟だ」

「なるほど。ラスコーやアルタミラ」

「瞑想してみよう」

「ラスコーやアルタミラの洞窟壁画を手掛りにしよう」

韋究と葦とは、厳しい冬の時代を観た。隕石による、過酷な、暗黒の長い千年間。しかし、普通の氷河期と比べれば短い。ルネ、白薔、紗々火、俠子の四人は興味深く感じて注視している。

「扉だ」

歓呼の声が上がった。何となく文化祭ノリだ。

「あったね」

「覚悟はいいか？ 開けるぞ」

「待つて。その前に新人さんたちを帰そう」

「そうだね。戻っていい」

「え、私たちも」

「もっと確かめたい」

韋究が手を左右に振る。

「男女同権だが、この場合は、だめだ。こっから先のことを俺らだけでやる」

「そう、そう、責任問題もあるし、今日は帰ってください」

「えー」

「組織で動こうぜ」

「そうです。僕たちは個人の意思よりもチームの意志で動かなくちゃいけません」

「わかりました」

不承不承帰る。

見送り終わると、葦は、

「組織と言うと規則がっちり縛られた感があるけど、チームと言うと何だか、絆とか信頼とか友情とか、人間的なニュアンスがあるね」

「実際、組織と言うと俺たちは大きな単位で考えるし、チームと言うと実務的な専門の小队を想い浮かべるからだろうな。」

小さい組織にいる人間の考えは別だろうが」

「日本という風土が横文字の呼称に厳肅さや深刻さや暗さが欠ける感覚を抱かせるせいもあるんじゃない？」

韋究が、

「そうだな。」

じゃ、開けるか」

「うん。そうだね」

「よし、逝くぞ。そらっ」

「あ」

「うわ、出たな。案の定だ。ベタ過ぎるぜ」

真っ黒い大きなもの。

その大きさは途方もなく巨大だ。無際限の質量。一切が静止する。静止せざるを得ない凄絶な重さ、空間も時間も歪むどころか、無際限に延びて沈み込む。凄まじい重圧だ。

視界には収まらないが、眼を瞑って感覚の拡張、超感覚で察する。

荘子の逍遙遊篇に出てくる鯤や大鵬など比ではない。雲が、

「数億光年の超銀河団が連なって構造を做す銀河フィラメントよりも巨大だよ。壓倒なんてもんじゃないね。怖ろしさすら、ぶっ飛ぶよ」

巨大過ぎて捉えられないが、それが在ることを感じる。混沌としている。無限に奥深い。深淵なる無窮のブラック・ホール。

誰もが根底から畏怖せざるを得ないも、韋究は強がって鼻尖で嘲笑い、

「あゝ、これが無明って奴だね。生存だ。ベタ過ぎるぜ。これが、もしも、漫画だったら超三流のB級だろうな」

「でも、凄いエネルギーだ」

「そりゃあ、そうだ。無数の次元の層に於ける無数の宇宙からなる全宇宙を、すべての異世界、全並行（平行）世界を生み出した原動力だ」

「これ、どうすればいいの？」

「いや、どうにもしないよ。」

必要なものだ。

理趣經（大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品）にもこうある、『説一切法清浄句門。所謂。妙適清浄句是菩薩位。欲箭清浄句是菩薩位』とね。ありとしあらゆるものもことも清浄であると説いた。性愛の快楽は清浄で菩薩の境地である。それを得ようとする欲望は清浄で菩薩の境地である、ということだ。

貪瞋癡の大源泉である無明混沌、大馬力の生存くんを悪者にする訳にも行くまい」

すると、無明なる混沌のなかから、冷儼儼肅な大審問官（Великий инквизитор）と十二枚の翼を持つ光の熾天使とが二重露出のように重なり合う存在者となって降りて来た。大審問官は赦しと罪について問うために来ていた。

大磊落が大瓦解したときの大轟音のごとき大雷霆が全宇宙世界を揺るがす。それは大審問官にして熾天使なる者の声であった。

「貪れ、瞋れ、癡かに生きよ。自己の尊嚴に狂固執し、他者を全否定し、自己愛自己肯定に盲目となって、世界を軽んじ、生存に妄りに執し、自己保存を哭き狂うほど切望し、大暴虐を働かけ。

狂躁乱舞せよ。

プリミティヴに躍れ。躍り狂え。

おい、解脱など、悟りなど、超越だの、脱自など、愚の骨頂。なせる者がいるか。

無駄、無駄、無駄、無駄。愚劣愚昧。

皆、死ぬ。不死の甘露など偽り。

そもそも、仏典は釈迦の記したものにあらず。死後数百年のちに書かれたもの。經典など古紙と乾墨の結合体、金や銀を使えば多少の価値はあろうか。はあはっはっは。偽善者どもよ。

もしも、釈迦が存命し、華嚴經や妙法蓮華經や般若理趣經や無量寿經を聞かば、さぞかし驚くであろうぞ。

般若波羅蜜多心經を褒めると思うか。

皆、宗祖を裏切った大嘘つきよ。笑止、笑止、笑止、笑止千万」

呵呵大笑して嘲った。

韋究もまた嘲笑を泛べ、

「何を今さら。」

よもやとは思うが、領主のお氣に入りの猟犬の眼に誤って、石を当ててしまった少年を母親の眼の前で猟犬の群れに咬み殺させた話を蒸し返すんじゃないな」

薨は眼を丸くし、

「カラマーズフ（ドストエフスキー著『カラマーズフの兄弟（Братья Карамазовы）』）か」

それには熾天使大審問官が応え、

「応ともよ、その問いは未だ応えられていない」

「そうかな。」

現実的には稀有なことだが、『クオ・ヴァデス』のなかで、多くのキリスト教徒がコロシムで大虐殺されるさなか、じぶんたちを売った男を赦す場面があるが、あれも答の一つじゃないか。

俺には無理だが」

薨も同意した、

「家族までとなれば、なおさら無理だよね。それができるのなら、復讐の連鎖も止められるのかもしれない」

熾天使大審問官はさらに嘲笑う、

「そのとおりだ。」

だが、母は領主を赦せるか。又、赦すのが善いことか。赦すのが正しいか。人倫だの道徳だのがこの世に存在すべき必然性はあるのか。

もう一度言おう、赦しは正しいのか。

ただ、社会的な動物となった人間の方便ではないか」

韋究が皮肉な笑みで片方の口角を吊り上げた。

「かもな」

熾天使大審問官は口角に泡を吹きつつ、

「かもなじゃねえ。絶対、そうだ。」

社会的に生きるためには、共存のためには、私情や私利私欲を殺し、集団に従順にならねばならぬ、他者に倣わなければならぬ、はみ出てはならぬ、利他のこころにならねばな

らぬ、寛容と慈愛がなければならぬ、大義に殉じなければならぬ。

手枷足枷だ」

さらに激越に昂奮し、

「勢い、自己犠牲が崇高な行為とされる。

畢竟、それも実利主義、損得勘定、生きるための知恵、生きたい欲望、生存だ。

だから、人は祭りのハレの日に無礼講をし、その抑圧を一時解放する欲求、必要に迫られる。

禁欲的理想主義にも限界はある。道を外れる者が多々あることも道理なる哉。人が罪を犯すは当然。人に生まれながらに罪あるは当然。

さりとて、親子兄弟愛する者への残虐は誰かが赦せない。理不尽ならなおさら。

おい、もしも、それ赦すなら、世界に戦なし。現実を見よ、延々憎み合い殺し合い、復讐に次ぐ復讐、祖は殺され、怨霊と成り果て、親は殺し、子は殺され、孫は殺戮者となる。無限に続き無際限に拡大する殺戮ぞよ。

この世は地獄、愛別離苦に怨憎会苦、求不得苦に老病死苦、五蘊盛苦の塊ぞ。

どこにも答はない。答える資格のある者もない」

拍手喝采、大歓声とともに出るわ出るわ。歴代々の怨霊悪霊、凄まじき哉。何十年何百年前から、いやさ、数千年来、数万年数十万年来の大悪怨霊ども。

続いては、彼らの眷属が次々とあふれ、あらわれる。異界の魑魅魍魎、乱痴気騒ぎの魔王の行列、百鬼夜行、蠍、ムカデ、毒蛇、蜘蛛。

「凄だね、どうしよう」

「ううむ。

幻、陽炎、夢、鏡像、蜃気楼、声の響き、水月、水面の泡、虚空華、巡回させた松明の炎の軌跡が作る光の輪、と言うのは簡単だが」

「無理」

「ええい、では。

なうまくさまんだばだなん、南摩三曼多勃駄喃（十方の諸仏に帰依したって祀る）」
言霊が八葉院を做す。それを中枢として黄金の胎藏界曼陀羅が宙空に立体的に映じ、廻る。次に九字を斬る。

「臨兵闘者皆陣列在前」

金剛界曼陀羅があらわれる。

「これでどうかな」

「韋究、いつの間にそんなことが」

「いや、できそうな気がしたらできた。そういうもんだろ」

十二枚の翼を持つ熾天使と大審問官が二重露出になったフォログラム的存在者が印契を結ぶ。

たちまち、空を覆い尽くすようにエントロピーを大膨増させる無明の黧黒い大混沌が呑み込む。いとも簡単に。

「無駄っ無駄っ無駄っ無駄っ。愚かつ愚かつ愚かつ。さようなものでよくなるうものなら、世は疾うに善くなつとるわ。ぐわっはははは」

「ち、言うと思ったよ。そりゃ、そうだ」

「呑気なこと言ってる場合じゃない、韋究、どうしよう。やっぱり生存には勝てない。生存が海なら僕らは水面の一片の枯葉だ」

「負けだな。勝つ気がしない。これも大自然の大摂理。どうして人間が勝てようものか。時節を待つしかない。未だ超越の時季・季節ではないのであろうよ。そもそも、人類全体としては未だかつて勝ったことがない。

やがて、時季・時節が来れば、超越するであろう。

時季・時節が来れば、生物は超越する。

鳥はある日突然、飛べるようになったのではなからう。しかし、飛べる方向へシフトした瞬間があったはずだ。ほんの微かに。

ここで斃れても、それはもう仕方ない。何世代か先に勝つかもしれない。そのための礎さ。一層のこと、死ぬる方へ向かうか」

「鳥か。」

いつかそんな話をしたね。しかし、それにしても、何だか、本当に『葉隠』みたいになっちゃったね」

葦もそういうきぶんになってきていた。きぶんとは、そういうものだ。そういう瞬間がある。

韋究はうなずき、

「生命を充実させよう。この一瞬で百年分くらいを生きるつもりで。魂の宇宙を熾え上げらせようぜ」

深く呼吸する。背中や踵で息をする。土踏まずの湧泉から氣を吸い上げて顱頂から抜く。

臍下丹田に氣を込める。

「いいよ」

「逝くぜ」

破れかぶれに突っ込んだ。激突、裂かれる。裂かれ砕かれた骨が相手に刺さる。槍のよ
うに貫く。

肉は牽きちぎられ裂かれ、燦々とあざやぐ眩きリアル。大自在の超越感覚、天高く舞い、
光爆の炸裂。

大エネルギーが無際限にばらばらに勝手な方向へ吹き荒び狂いぶつかり交差し入り混
じり反撥して背き弾け爆ぜて拡がった。無限の拡大。過剰なる自由奔放。零になる。絶空
となる。

だが、その瞬間。

全てが消えた。何もない沙漠に戻っていた。

二人はしばし茫然としていた。

渺茫とした沙漠がただ在る。ようやく韋究が言った、

「何もない。ただの沙漠だ……。あゝ、助かったぜ。死なんとすれば生き、生きんとすれ
ば死すとは、このことか。」

まあ、平凡な日常もビッグバンから生まれたんだからな」

「あゝ、何だか祝福されたきぶんだよ。生きているって、祝福なんだな」

「そうかもな。」

でも、さすがに全部がそうとは言えない。病や拷問や災害や戦争のときには、生きてい
ても祝福とは感じられないだろうぜ」

「そうだね、実際、今の僕らも何も全然解決していない。前につんのめって斃れた、それ
だけだ。」

結局、未遂不収、ってことだね」

第 七 章 光燦々たる天空へ

相変わらず古代遺跡の前にいる。蜚が半ば砂に埋もれた何かを見つけた。大きな豎琴か、
ハープのようにも見えたが、よく見れば、深く精緻な浮き彫りのある石の板状のものであ

った。

「これは何だろう」

衝動的に砂を掻いて掘り出す。砂は熱かった。手が火傷しそうなくらいだった。砂はきめ細かくて軽いけれども。

掘り出してみると、竖琴やハープとは全く異なるものであった。

「どう見ても扉にしか見えない。新たな地平を開く知覚の扉か」

「真歓へと導く扉ということかな」

「ならば、天国への扉と言うべきだろうな」

開けた。

不思議な空間で、洞窟のようであったけれども、明るく、乾いていた（砂漠が続いているとしたら当然だが）。壁も人工的ではないが、かと言って自然でもなく、マットななめらかさで、洞窟のような湿りや、どろどろした感じ、濡れた荒々しい巖肌や、粘土質などもなく、神秘もおどろおどろしさもない洞窟的、かつ、胎内的な空間であった。

天窓のある素焼きのツボのなかにいるかのようなでもある。

実際、天窓のようなものがあって、そこから光が盈ちあふれ、反射というほどでもない、柔らかい光が淡く反射していた。

何だかゆっくり坐りたくなった。坐った。二人とも。

「あれ」

小さな孔があつて、一滴の水があふれこぼれるよう込み上げて来て、つっと流れた。少し置いて、また一滴こぼれる。

他の場所からも出て来た。

よく見るとそちらこちらから。

眼には定かならねども、若干の傾斜があるらしく、水滴はどれも一滴ずつ、つっと流れ出る。

それはてんでばらばらで、それぞれ勝手な方向へ流れ、どちらへ向かってどう逝くかは予想もつかず、一つの流れとなることもなかった。

「何だか、表情があるね」

薫が言った。

「表情？」

「うん。何だか、戸惑っていたり、怯えていたり、恥ずかしがって躊躇しているみたいに

見えるよ。感情と言うか、正確に言えば、知性を感じる」

「なるほど。」

言われてみれば、遠慮しておずおずしているようにも見える。表情やしぐさを感じさせる。

俺たちの知性もこんなものなのかも知れないな」

「そんなふうに思えば、空ということが、無や空っぽや何ものでもないことや零ではないことがよくわかる。もともと現実的なことだ」

太陽が動いて、天窓の光がレンブラント・ライトのように明晰に差し込む。霧のような金粉を帯びていた。

「階段だ」

それはまさしく階段になった。

天窓の上が続いているが、上がってみると、空高く続いている。壁も天井もない。雲よりも高く、どこまでも続いている。しかし、手摺りすらない。

「逝こうぜ」

「韋究、ちょっと怖過ぎないか」

「逝くぜ、逝くんだ。一度は死なんとした命だぜ。逝ってやろうぜ。勇気を失うことは全てを失うことだとゲーテも言ったじゃないか」

『『温順なクセーニエン』の一節か。初めから生まれて来なかった方がましであったであろう、だなんて。

なかなか厳しい言葉だね。

それが本当なら、生まれて来る価値のない人間が大半だ。少なくとも現代では」

「眞神の言葉にもある」

「ああ、あれか」

「そうさ。思い出せ。」

そして、大きい声で言ってみろ、『人、堂々果敢すべし。人、義しきとおもふを為す善し』ってな。

能書はいい、實際が大事だ。

直截観取で現実には直参し、義しいと思えたことを只管に信じて、正々堂々敢然として勇猛に進め」

「出鱈目に進んでも、無責任だよ」

「〃図に当たらぬは犬死になどと云うは上方ふうの打ち上がりたる武士道なり〃」って言うだろ」

「わかった、わかった、わかったよ。死ぬる方へ逝こうじゃないか。無茶苦茶だ。僕はサムライじゃないよ」

「狂裂自在、自由狂奔裂さ」

「何かハイになってないか。大丈夫かな、その判断」

「てやんでえ、べらんめえ、矢でも鉄砲でも持って来やがれー、ってか？ あはは、くさくさ言うな、死なんとせば生く、さ。」

「いや、これは言うよ、韋究」

手摺もない、薄っぺらな平面の帯のような階段を吹き晒しになか、たどたどしく進む。物凄い高さだ。

「中国のあの絶景の栈道さえ及ばない。凄く怖い、だめだよ」

「うん、俺もちよつと後悔してる」

「戻ることも同じく危険だ」

いかづちの轟く厚い雲を抜けて、透き通った蒼天、高い雲を超えたところで階段は途絶えた。

「どうしよう、韋究」

「きつと、この雲は乗れるんだ」

「え？ 何の根拠があつて」

「わからない。感じるんだ。生物は皆、最初から全てを知っているんだ」

「本気？ まじで言ってるの？」

「大まじさ」

「いい加減なこと言わないで。根拠がなくちゃだめだよ。」

ねえ、落ちたら死ぬよ。これは想念だけの世界じゃないよ、現実だよ」

「こころを鎮め、精妙にしろよ。」

現実を観れば、現実が見える。

それが真実だ。

俺たちは既に知っているはずだ」

薨は息を呑んだ。

「それにしても命懸け過ぎる」

「バンジーだと思え」

「バンジャーなんかできないよ」

「俺もだ。」

だが、やればわかる」

一歩踏み出した。

「あ」

一瞬、沈んだ。

だが、落ちなかった。

韋究が歎息とともに言う、

「どうやら、大丈夫らしい」

「何で残念そうなの」

「いや、別に」

「僕だけ落ちるとかないよね」

「わかるか」

「やめてよ」

「来い。それでわかる。今は笑われても、いつか輝くさ」

「何の話？ もう、どうしたらいいのか、あゝ、神様」

「来たくなきゃいいよ」

「それも無理だよ」

「じゃ、俺は逝くぜ」

「ええいっ！ ああーっ」

半身沈んだが、止まった。

「うわああああ、死ぬかと思った。心臓止まりそうだった」

韋究が笑う。

「どうやら信の度合いで乗るか落ちるか決まるようだ。信が弱かったな」

「でも、乗れたよ。いや、信じろって言う方が無茶だよ」

「それは言えるな。さ、逝こうか」

白く輝く雲は黄金を帯びていた。霞のような金粉がまとわりついている。少し影になる部分は紫色だった。体は無重力のように軽く、風のように疾く、翼ある龍馬のごとく空間を突き抜けた。

ロマネスク建築のような窓の少ない、石の組積造建築が天よりも高く聳えていた。

「城砦にも見える。荒々しいな。天国にこんな建物があるなんて。武そのもの」

韋究が疑義を呈するも、葦は、

「ねえ、バルハラって書いてあるよ。ルーン文字だ」

分厚い黒鋼と鋌とで強化された儼櫃の扉が開いた。巨大な扉で、見上げれば仰け反り返ってしまふ。上方は見えなかった。

猛々しい巨体の武人、北欧神話に出てきそうな肉体、太く逞しい腕、分厚い鎧、獣毛皮、ツノのある鋌打ち兜、重たい太剣、神獣の浮彫のある鋼鉄の楯。

「お前たちを待っていた。」

誉め讃えられよ、その勇猛、叡智、力よ。

史上稀なることを壽ぐ。

お前たちは生存に打ち勝った。

未来永劫、蒼天穹に鳴り響きわたる名誉よ、賞讃よ、萬華のごとく降り乱れよ、栄光よ、光よ、そのあるがごとくしあれ。

さあ、戦じゃ、戦じゃ」

戦士たちは殺戮を始めた。剣を振るい、槍で突き、弓を放つ。多くが死ぬが、死したものは晩餐の時刻になると蘇り、

「宴じゃ」

そう叫び、宴の間に集い、野牛の大ツノの杯を掲げ、大酒宴を行う。

そして、また戦い、死し、蘇り、宴をする。

葦が言う、

「どうせなら、もっと違う天国が見たいね」

「そだな」

意識が変われば同じ處でも変わる。

それゆえ、宗教や民族や時代によって天国もさまざまだ。

物事のかたちは自由なので、何も矛盾はない。AはAのままBであり、BはBのままAなのだ。

天国はここにあると言うが、しかし、ここは人の胸中や脳裡にある訳ではない。

荘厳な大聖堂に來た。

列柱の大回廊があり、その上には聖人の大理石立像が蒼穹を背景に数千ならぶ。足下は

大理石の壮大なモザイクであり、聖堂内に入れば、リヴヴォールトの高い高い崇高な天井、柱にも壁にも窓にもアーチにも黄金と彫刻とによる繁縷なまでも装飾の横溢氾濫。あふれんばかりだ。

聖なる祈禱が高らかに響く。吊り下げられた大きな香爐が揺れ、香で清め祓う。イコンや祭壇画、壮麗だ。

聖なる祭壇、その後ろは黄金の祭壇衝立で、数千万の聖なる彫像が荘嚴されていた。

「凄いね」

「別のものも見たい」

解釈の変更を行う。

「全ては解釈が異なるだけで同一だ。そもそも、否定したり、肯定したりする意味はない。すなわち、争う意味はない。それがわかれば、超越的な立場であることと、同じだ。

一切の執著を厭離し、超越すれば争いはなくなる」

そう思うとき、法界宮があらわれる。その巨大さは宇宙そのもので、宝飾に満ちあふれていた。その中枢の師子座に大毘盧舍那世尊が鎮座する。

「なるほど、万物万事万象は平等で無差別、争いなど仮象に囚われた者の幻影。あまりにタイミング良過ぎて恣意的だ。何となく、眉唾臭い。

親子兄弟姉妹を殺された者の怒り哀しみ恨みが無差別平等で収まる訳がない。人は生存を超越できない。

俺たちも勝った訳ではない」

金剛法界宮も胎藏法界宮も砂塵のようにたちまち消える。

「俺たちは科学と芸術と哲学と宗教を統合した大統一に至った。

しかし、世俗の人間は決して理解しないであろう。解脱直後に死を望んだブツダの思いもこんな感じか。

ましてや、解脱に至らぬ俺たちにとって、ここは恐るべき荒野だ」

それは存在の不安であった。

韋究は蒼白であった。珍しいことだ。さすがの韋究も、じぶんたちがいかに危うげな、綱渡りのような状態かを如実に感じたのだ、存在の根源から揺さぶられた。

その根源的不安を藁は感じ取ったが、韋究の表情からはすぐに消えた。

ただし、その楔が全く消えることはないことを理解していた。もしかしたら、いつか韋究を蝕む日が来るかもしれぬという、言い知れぬ不安を覚えた。

解脱する以外に救いはない。

たぶん。

茫漠たる霧に包まれていた。森だ。静かに動く鹿の影が見える。

「鹿野苑か」

「じゃ、きっと」

静謐なる仏陀が坐禅を組んでいた。

「近づいていいのかな」

「しかし、話し掛けてよい状況ではないな」

二十メートルほど離れて見守っていた。

半眼で瞑想に耽ったまま、釈迦の方から尋ねてきた。

「私に何か」

韋究も蕤も息を呑んだが、韋究が勇気を出し、

「生存に打ち勝ち、生命に至る道を」

釈迦は少し黙っていたが、やがて、語り出した。

「古来、聖賢者はいふ、『生存は非なり、生命にあらず』と。されども、生存こそが人間にとって直截素朴な実際である。酸素、飢えや渇き、排泄、熱さ冷たさ、痛みなどなど。いずれが切実ならずや。ならぬなし。

生存は生命の翼であり、權である。なくば進まず。超越を成せず。遙か天空への超越こそが生命の大義であり、眞^{イデア}である。

我死して一千年ののち、『般若波羅蜜多理趣百五十頌』、又は『大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』にいふ、男女の性愛も清らかなり、と。超越の足枷となる執著の源である生存がなくなれば超越がなせない、人間存在がなせない、生が続かない。理趣經は正しい。

翼を以て光燦々たる天空へ翔けよ。無餘依涅槃の光の解脱のなかへ」

そして、沈黙に戻る。深く穏やかな、何一つ欠けることのない、尊い平安。もう、それ以上は、到底、話し掛けられない。

無餘依涅槃って、つまりは終焉、死でしょう？

蕤が韋究にそっと訊いた。

韋究は、

「そうだ。」

解脱した聖者も酸素が必要だ。生存のため、最低限のものが要になる。第一が空気だろうな、これがないとすぐ死ぬ。次は水かね。同じくらい排泄も大事だ。これも死に直結する、飢えよりも面的面だ。

全て生存の命令だ。だから、それも執著になる。厭離すべき執著になる。

全ての執著から厭離した状態、それが死だ」

「最後は誰でも執著を厭離するってことか。だから死んだら、仏っていうのかな」

「そうかもな。」

だが、誰でも死ねば厭離するってもんじゃないだろ」

「そうだね。」

恨みを残して怨霊になる場合もある。それも苦しいものだろうな。苦しいから、その胸の苦しみを霽らそうとする。それが憎しみであり、恨みの激越な衝動となる」

「生前に解脱していないとね。死んでも報われない。世のなかで報われないのは、本当は大したことじゃない。所詮、とてもかくても候、なのさ。問題なのは、死して後、永遠の生に於いて報われないことだ」

「兎にも角にも、死後はあるよね。阿頼耶識の世界だ。そう信じたい」

「時間が多次元の世界では、現在過去未来が同時だ。死後も未来や過去や現在のうちに在る」

「君がそう言うとは真実のように聞こえる。強いプレゼンスを感じる。君は何かに取り憑かれて、天空の声を代弁するかのようだ。」

君が言うとおりに信じたいよ。あゝ、死後が、もしも、あれば、希望が持てる。

そうでなければ、ただ、生きて、ただ、死ぬだけだ」

「皆、そうだった。なら、それでいいんじゃない」

「それじゃ、意味がない」

「意味か。」

お前もわかっているはずだ。そんなことを問い、気にし、執著することの虚空が。俺たちの思考は水滴と同じだ。俺たちの知性が物的な現象であると言うよりは（それも間違はなくそうなんだが）、水滴にも知性があるということの方が正確だ。あれが知性だ」

「君はそれに、それに耐えられるんだね。ただ、生きて、ただ、死ぬ」

あゝ、韋究、君は偉大だった。君はたった一人の、ただの人間なのに全てを背負っているかのように僕には見える。

もしかしたら、君は Ounpos のように全てをわかっているのかも知れない。君の運命は全てを君にわからせているかのように見える。

いや、誰もが全知に繋がっている。

誰もが萬物萬事萬象の海に浮かぶ木の葉だ。

その海は集合的無意識であり、阿頼耶識であり、アカシック・レコードだ。人は皆それに繋がって、それを生きている。

だから、誰もが全てを知っている。君だけではない。だけれども、誰も目覚めていない。空想が現実の全てだ。卑小で矮小な顕在意識にとっては、その空想が全てだ。他がない。深く深く睡眠の水底に沈んでいる。

だけれども、君の魂は目覚めていて、強靱な精神でそれに耐えている。堪えている。いつまで堪えられるのであろう。いつまでもものように見える。

君は現存する人間のなかで、僕が唯一認める偉人だ。超人だ。

それに比べて、僕は。弱い。僕は何て弱いのか。脆くて儂い。弱過ぎる。僕は。

韋究に比べて、何と卑小か。矮小なのか。

そう想い続けて、顕在意識の世界に戻り、数日経った或る日、夢はまたも独り Ounpos を訪れた。

光を求めて。

愚かと分かっている、収まりのない魂は、こころの苦しみを吐露して、問う、「死後はあるか、来世は」と。

Ounpos は曰く、

「なぜ、死後のことなど訊くのか。来世が在るかなど。それに就いては無記とする。それはいづれ死せばわかること」

夢は怯んだ。じぶんでもそう思っているからだ。しかし、収まらない。

「そう言うと思いました。でも、教えて欲しかった。それが人間なんです。弱い不完全な者です。どうにもならない。性情はどうにもならない」

Ounpos の双眸はあさひに燦めく湖のように、揺らぐ光のモザイクに盈ちあふれ、もし、言葉が無意味であったとしても、真理じたい、真理そのものとして、こころからこころへ

とバイブレーションするであろうと思われるほどであった。

「もし、死後にどうなるかを知っても、何の解決にもならない」

藁は菌を食い縛るよう、必死に喰らいつく、

「それは、そうでしょう。」

けれども、知りたいと思うのは已むを得ないことです。人間なんです。植物や動物や微生物と同じです。どうにもならない。宿命なんです。結局、人間が意識するのは、人間の関心が吸い寄せられるところは、畢竟、死です。生きたい気持ちです。人間の究極の欣求は不死です。

既におわかりでしょう。

人類が行動する動機の究極は終焉を怖れ、駈り立てられるからです。死に集約しています。シューメールのギルガメッシュの時代から何も変わりません。恐らくはもつと以前から、遙か以前から。でも、何千年経っても、何ら解決もない。何をしようが、結局は死ぬ。死に打ち負かされる。敗れ斃れる。

解脱し、超越した仏陀でさえ、罹病し、苦しみ、喉の渴きを訴え、ただの人として衰弱し、死した」

「それが真究竟の真実義であり、不死である。釈迦牟尼如来、すなわち、釈迦族の聖者は人類究竟究極偉の人のうちの一人であった」

「それは眞神真義塾で習いましたが、その言葉では不安は消えないのです。あゝ、確かめようのないことです。そのところが実際、どうであったかは」

「それでも、皆、死ぬ。誰も間違っていない。

ところがどうあろうと、現象が全てを奪う。実際、事実、実在がそうであれば、こころなど、いかほどなものであろうか。

そもそも、不死とは何か。何のことを言うか。

死を超えた者は、不死を望まない。敢えて、不死たんとする者は、未だ死を怖れている。

ならば、不死になっても、こころの不安は消えない。何も解決していない。

ただ、『喉が渴いた。水が飲みたい』と言うことこそ、問わずとも不死であり、解脱であり、超越であり、絶空であり、超絶の崇高であり、全肯定であり、燦々たる狂裂自在、いかであろうとも自由狂奔裂、真に奥の奥なる真究竟真実義である。誰もが無餘依涅槃である。

そう、それと知ろうが、知るまいが無餘依の涅槃。

だが、知れば、こころやすらぐ。いくらかは。どちらがよいか、おのれが好きに選べばよい。それしかないのだ、結局。

しかし、憶えておくがよい、どちらを選ぶとも、何を選ぶとも、選ばぬとも、その選択は既に生まれる前から、性根としてお前の奥底に在ったものだ。それからは決して遁れられぬ。

だが、気にするに及ばぬ。

いずれにせよ、無為。そうであっても、そうでなくても、無為。どうであれ、無為。全く同じこと。

さもありなん。

在るは、ただ、現実のみ。他に何があり得ようか。現実しかない。ただ、それしかない。

真実はそのしかない。無味乾燥、無機質な、事実しかない。

それは誰もが知る、いかに世俗まみれで、いかに愚かで、実体のない迷妄の価値観に囚われている人間ですらもよくわかつている、執著に狂わされている者すらもよく知る、周知している真実、疑いようのない事実、現実である。

見よ。

櫻華は散る。

その自然の摂理は限りなく美しい。龍のごとく肯んぜよ。

藝術の極致、眞歆。

飛翔をすらも飛び越える飛翔、超越を超える、狂裂なる超越。竟^{おわ}んぬ」

アカシック・レコード、阿頼耶識、集合的無意識の世界で経験したことが、激しい疲労を与え、ここしばらく夢は静養していた。

研究室に戻ってからは、溜まった仕事に忙殺され、ふと気がつく。なぜ、忘れていたのであろうか。

最近、韋究に会っていない。

彼の研究室を訪ねた。夢も持っているが、個室が与えられるのだ。

ノックをした。返事がなかった。

もう一度叩いた。

何か声が聞こえたような気がした。引き戸の取手をつかむと、ロックされていないことがわかった。いつもそうであったが。

「韋究、僕だよ。入るよ」

そっと少しだけ開けた。

韋究は坐っていた。夢の方を見ず、ぼんやり壁を見ていた。

「おい、韋究、どうしたんだ」

机上もテーブルも散らかっていた。さまざまな本があった。多くが画集のように見えた。韋究は返事をしない。呼吸はしているようだ。生きてはいる。

「韋究ってば」

やっと物憂げに夢の方を見る。

「やあ」

そう言ったように見えた。

「どうしたんだ」

周囲を見廻しながら、尋ねたが、応えはなかった。

ヴァインセント・ヴァン・ゴッホの画集が開いていて、秋の収穫が赤系の色彩で描かれた絵が見えていた。

「ゴッホの唯一売れた絵だ。買ったのは画商であった弟のテオだ。今でこそ数億円数十億円取引される彼の絵も、彼が生きている間には全く売れなかった。彼はじぶんじしんが偉大な、有名な画家であることを遂に知ることはなかった」

薔はそうつぶやいた。

そして、韋究の前に立った。

まるで、廃人のようなだ。眼差しは虚ろで、気が感じられず、肘掛け椅子に力なくもたれている。手には頁が開いたままの一冊の本を持っていた。実体のない無力なはずのものが韋究を打ち破ってしまったのだ。

むろん、具体的に何か病名がつくはずだ。人間も物理的な現象なのだから。そのためには状況を把握しないと。それが現実だ。

「ねえ、韋究、どこか」

具合が悪いのか、病気なのか、と訊こうとしたが、やめた。ホルモン・バランスが崩れたとか、何かの神経伝達物質が過剰に分泌されてしまった、とか、情緒や知性に関わる病ならば、慎重に対応しなければならぬのではないかと思ったからだ。

「むろん」

人間も化学的な現象の集積である。そうなる原因が起これば、そうなる原因の導く通りの結果になる。理由はわからないが、世界は因果律に規定されている。縛られている。全て因子による現象でしかない。必然性、自由はない。ヒュームは否定したが。

いずれにせよ、固有の人格は実体としては存在しない。それはヒュームも肯定するであろう。

全ては刹那／＼の化学反応による集積が、たまたま、その瞬間／＼に人間を形成しているだけだ。あたかも連続性があるかのように装おって。

「けれども、信じ難いよ。君のような人が。神のごとく、君は全ての遮蔽物を越えた。い

つも皮肉な笑みで。

ミケランジェロが神のごときミケランジェロと呼ばれていたならば、君にもその名が相応しかった。不敵な自信に満ちていた君に」

これも已むを得ない現実か。

櫻華の散り乱れる美しき自然の摂理か。

そうであろう、間違いなく、そうであるだろう。しかし、正しいことか。いや、正しくない。『現実は今肯定だ』と韋究は言った。

だから、一つだけを肯定するのもよい、って。つまり、現実で起こることと同じだ、と。そんなことがあった。

あったけど、それがどうした。海で溺れたときそんなこと考えるか、爆撃されたとき、炎に包まれたとき、考えるか？ 考えない。考えないとすら思わない。だから、今はそんなときじゃない。違うか？ いや、そうじゃない、そうじゃなくて。

あゝ、この緊急事態に僕は何を言っているのか。

あゝ、けれども、どうにかなりそうだ。

言葉があふれて止まらない。

「さあ、逝くよ、韋究。君がこんなことで、どうにかなくなってしまっただけはいけない。さあ、韋究。逝こう、韋究。ねえ、立てるかい？

兎にも角にも、ドクターのところへ。さあ、韋究。逝くよ。君は少なくとも体がどこか悪い。それは間違いない」

彼を起こそうと屈んだとき、開き掛けのページが見えた。

夢も読んだことがある美術書だった。想起する。何度も想起したものだが、記憶のなかで繰り返すうちに幾許か変じていた。

ジョルジュ・スーラに関する章だ。新印象派、点描派などと呼ばれたスーラは才能ある画家であったが、三十一歳で世を去った。

彼の盟友であった画家シャニツクの言葉だ。それは限りなく美しく悲しくて、忘れられないものであった。読んだ当時、感銘した文章（ただし、反芻するうち、無意識的に改竄・脚色され、原文に沿った正確な文章ではなくなっているが）であった。

『……スーラが世を去って逝ったとき、批評家たちは彼の美学と才能とを讃えたが、こうも言った、残念なことに、若くして死したため、彼は作品を残す時間がなかった、と。

だが、私はそう思わない。スーラは人間として可能なことの全てを行なった。全てを出

し尽くした。

絵画に於けるすべてに新しい見通しを立て、白と黒との効果を整理し、線と形態とのバランス、構図の取り方、色の対照とハルモニアすべてを検討し、決定的に確立した。彼の仕事は完成し、見事に成就している。

一人の画家にそれ以上、何を望めるのか……』

薨は振り払うように激しく首を振る。

「むろん、望めようはずもない。限界がある。理想は追えない。息をしている人間なんだ、無餘依涅槃なんて無理なんだよ。飛べと言うようなものだ、超越なんかできっこない。少なくとも、一世代ではあり得ない。絶対に。破滅しかない。途上の犠牲、無名の犠牲。積み重ねられた屍の一つ。

全肯定なんか無理だ。それが現実だ。

だから、墜ちた。墜ちるべくして落ちた。太陽を目指したイカルスのように。

葬之イタルのように」

所内には医院がある。どうにかそこへ連れ込む。途中、多くの助けを求め、さまざまな人に援護されたが、薨は憶えていない。

最大の危惧は、フリードリッヒ・ニーチェのように、韋究が韋究であって韋究でなくなってしまうことだった。

晩年（と言っても四十半ばから五十半ばであるが）、ニーチェは躬らをディオニユソス、十字架に架けられた者と言い、仏陀、アレクサンダー、シーザー、シェイクスピア、ヴォルテール、ナポレオンも我が化身であるとした。コジマ・ワグナーをアリアドネと呼んだ。そして、最後は意思の疎通もままならぬまま、五十五歳で死した。

今、幸いなことに韋究は恢復に向かっている。春の窓から病院の庭をベッドの上半身部分を電動で立てて、静かに眺めている。

医師は奇跡だと言った。

韋究ならば奇跡など当たり前だ。薨はそう言った。そして、虚しく微笑んだ。偶然、葉が合った。

偶然に過ぎない。医の力ではない。薨はそう思い込んでいた。幸いなことだ、と。紛れもなく奇蹟である、と。

しかし、いや、それゆえに、薨の不安はあれ以来、掻き立てられ、狂おしく止まらなか

った。

脳内の機能の何かが壊れ、神経伝達物質の分泌が狂えば、人はその人ではなくなってしまふ。人間存在とは、そのような儚い一時的な化学的現象でしかない。それが連続の見掛けを做す非連続でしかない。

それは何もない、という以上のことだ。無空ですらもないということだ。絶空すら面白い種だ。

結果がその人の定めだ。最初から決まっていた運命だが、最後の最後まではわからないため、運命を考慮することに意味はない。

科学的に明晰判明で、無味乾燥な事実、それしかない。仏陀が死せるごとく。

誰もが知る、当たり前な現実しかない。

解脱しようがしまいが人の勝手だ。自由だ。何も指標指針はない。現実しかない。自由狂奔裂。絶空だ。